ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第 40 号

平成３年度発掘調査予定の遺跡……奥村清一郎…1
平成２年度京都府内埋蔵文化財の調査……辻本　和美…5
宮津城跡第８次の発掘調査……森島　康雄…14
桑飼上遺跡の発掘調査……岸岡　貴英…20
雲宮遺跡の環濠……戸原　和人…26
南山城地域の後期古墳の一様相 ―城陽市・長池古墳を中心として― ……小池　寛…33
―平成２年度発掘調査略報―……44
17. 蔵ケ崎遺跡　20. 天若遺跡
18. 左坂古墳群　21. 長岡宮跡第250次
19. 荒堀遺跡　22. 伏見城跡
府内遺跡紹介　51. 笠置寺旧境内……58
長岡京跡調査だより……61
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧……64
センターの動向……65
受贈図書一覧……67

1991年6月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

平成３年度発掘調査予定の遺跡

奥　村　清　一　郎

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが、平成３年度に予定している発掘調査事業は、別表に示したとおり、29件を数える。このうち、27件(48遺跡)については、発掘調査を行い、残る２件は遺物整理・報告書作成を行うものである。発掘調査27件を原因工事別に見ると、例年と同様道路の新設・拡幅に伴う調査が最も多く12件、調査面積にして24,700㎡を数える。以下、各種の庁舎建設に伴うものが４件5,280㎡、施設整備に伴うものが２件3,000㎡、職員住宅建設に伴うものが２件1,800㎡、農業団地造成・ほ場整備・学校建設・ダム建設・派出所建設・河川改修・住宅団地造成に伴う調査が各１件64,940㎡を予定している。これらの発掘調査を実施するに当たっての事務局の体制は、昨年度同様３課６係体制で臨むことになったが、今年度は受託事業量の増加に伴い調査員１名の増員がはかられ、職員総数43名で事業を推進することとなった。調査予定の遺跡の概要は以下のとおりである。

１こくばら野遺跡は、久美浜湾近くの台地上にある集落跡である。国道178号バイパス建設に伴い、平成２年度から調査を進めているもので、奈良時代の集落に関する調査成果が見込まれる。

２遠所遺跡群ほかは、丹後国営農地開発事業に伴う調査である。遠所遺跡群のほか、古墳群４件(久美浜町堤谷古墳群、弥栄町太田古墳群、大宮町左坂古墳群、同通り古墳群)、中世山城跡１件(久美浜町野中城跡)、散布地１件(大宮町菅外遺跡)の調査が予定されている。古墳群は、丘陵上に累々と並ぶ木棺直葬墳の調査が中心となる。菅外遺跡は、ほ場整備事業に伴い大宮町教育委員会によって実施された試掘調査で、縄文時代以降中世に至る各時代の遺構・遺物が確認されている。

３鳥取古墳群は、遠所遺跡群の東に接する丘陵地にある円墳・方墳計15基からなる古墳群で、農業関連施設の新設に伴い調査を実施する。遠所遺跡群に隣接していることから、谷部分を対象とする試掘を計画している。

４裏陰遺跡は、縄文時代早期の押型文土器が出土する遺跡として著名である。今回、府営ほ場整備事業に伴い、遺跡の北方部において調査を実施する。

５下畑遺跡ほかは、府立学校の改築に伴う調査で、野田川町下畑遺跡(加悦谷高校)及び木津町燈籠寺遺跡(木津高校)の調査を計画している。下畑遺跡の調査は、昭和57年度調査

平成３年度　発掘調査事業予定一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	原因工事	調査対象面積	調査予定期間	備　考
1	こくばら野遺跡	集落跡	久美浜町	道路建設	500㎡	4～6月	継続
2	遠所(えんじょ)遺跡群ほか	古墳ほか	弥栄町ほか	農地造成	50,000㎡	4～12月	継続
3	鳥取(とつとり)古墳群	古墳ほか	弥栄町	施設整備	1,000㎡	11～12月	新規
4	裏陰(うらかげ)遺跡	集落跡	大宮町	ほ場整備	800㎡	6～8月	新規
5	下畑(しもはた)遺跡ほか	集落跡	野田川町ほか	学校建設	1,600㎡	8～2月	継続
6	蔵ヶ崎(くらがさき)遺跡ほか	集落跡ほか	加悦町	道路建設	800㎡	7～12月	継続
7	高田山(たかだやま)古墳群	古墳	福知山市	農道建設	400㎡	6～9月	新規
8	天若(あまわか)遺跡	集落跡	日吉町	ダム建設	4,000㎡	4～12月	継続
9	小谷(こたに)古墳群ほか	古墳ほか	八木町ほか	道路建設	2,800㎡	4～10月	継続
10	千代川(ちよかわ)遺跡	官衙跡ほか	亀岡市	道路建設	1,500㎡	10～12月	新規
11	池尻(いけじり)遺跡	散布地	亀岡市	道路建設	1,000㎡	7～9月	新規
12	平安宮跡(社会保険)	都城跡	京都市上京区	庁舎建設	80㎡	4～6月	継続
13	平安宮跡(職安)	都城跡	京都市上京区	庁舎建設	700㎡	5～10月	新規
14	平安京跡	都城跡	京都市下京区	住宅建設	600㎡	8～11月	新規
15	平安京跡隣接地	都城跡ほか	京都市南区	庁舎建設	2,000㎡	5～11月	新規
16	東寺旧境内	寺院跡	京都市南区	派出所建設	40㎡	4～5月	新規
17	野田(のだ)遺跡	散布地	向日市	住宅建設	1,200㎡	6～10月	新規
18	長岡京跡ほか(名神)	都城跡ほか	向日市ほか	道路建設	11,000㎡	4～2月	継続
19	長岡京跡(府道)	都城跡	長岡京市	道路建設	1,000㎡	7～12月	継続
20	算用田(さんようでん)遺跡	散布地	大山崎町	庁舎建設	2,500㎡	7～10月	新規
21	木津川河床(きづがわかしょう)遺跡	集落跡	八幡市	施設整備	2,000㎡	6～11月	新規
22	内里八丁(うちさとはっちょう)遺跡ほか	集落跡ほか	八幡市ほか	道路建設	3,500㎡	4～2月	継続
23	興戸(こうど)遺跡	集落跡	田辺町	道路建設	400㎡	11～1月	継続
24	防賀川(ぼうががわ)遺跡	天井川ほか	田辺町	河川改修	500㎡	7～9月	新規
25	樋ノ口(ひのくち)遺跡	散布地	精華町ほか	道路建設	1,000㎡	4～7月	継続
26	堂ノ上(どうのうえ)遺跡	散布地	山城町	道路建設	800㎡	6～8月	新規
27	瀬後谷(せごだに)遺跡ほか	瓦窯跡ほか	木津町	団地造成	8,000㎡	4～2月	継続
28	桑飼上遺跡	集落跡	舞鶴市				整理
29	野崎古墳群ほか	古墳ほか	綾部市				整理報告

で中世の方形板組み井戸が検出された地点の南西部で計画しており、中世集落が検出されるものと思われる。燈籠寺遺跡では、方墳の一部(内田山古墳群)が見いだされる可能性が強い。

６蔵ケ崎遺跡ほかは、国道176号バイパス建設工事に伴い、加悦町内で蔵ケ崎遺跡と嗎岡遺跡の２遺跡の調査を予定している。蔵ケ崎遺跡の調査は、平成２年度に検出した弥生前期の溝の東側、集落寄りの地点にトレンチを設定する予定である。

７高田山古墳群は、中丹広域農道建設工事に伴う調査である。平成元年度に古墳時代後期の方・円墳、３・４号墳の調査を行ったが、その後の設計変更に伴い、一辺22mの方墳、２号墳の調査を行うことになった。古墳時代後期前半期に属すると思われる。

８天若遺跡は、日吉ダムの建設に関連して、平成元年度以降継続的に調査を進めている遺跡である。古墳時代後期の集落、奈良時代の建物跡・条里遺構等の広がりを追究する。

９小谷古墳群ほかは、京都縦貫道路建設に伴う調査で、古墳５件(園部町川向１号墳、同今林古墳、八木町小谷17号墳、同西所古墳、同沢ノ谷古墳)、須恵器窯跡２件(八木町古谷窯跡、同堂山窯跡)の調査を予定している。

10千代川遺跡は、丹波国府推定地の一つとして周知されている遺跡である。推定国府域を南北に縦走する道路の新設工事に伴って試掘調査を実施する。

11池尻遺跡は、坊主塚古墳の南方に展開する遺物散布地である。歴史時代の遺物が多数散布している。府道の新設に伴い、延長約900m分を試掘するものである。

12平安宮跡の調査は、大極殿院の北回廊に相当する位置で実施するものである。隣接地の調査では回廊の基壇が確認されており、関連遺構が検出される可能性はきわめて高い。

13平安宮跡の調査は、平安宮の東北隅近くの大宮大路の推定路面上において行う。また、安土桃山時代の城郭、聚楽第跡とも重複しており、両者の調査成果が期待される。

14平安京跡の調査は、平安京条坊の右京七条二坊推定地において行うものである。

15平安京跡隣接地の調査は、市バス九条車庫敷地内で計画しており、平安京の外周部及び縄文時代から江戸時代の遺構・遺物が知られている烏丸町遺跡の調査を行う。京都サンプラザ(仮称)建設に伴う試掘調査である。

16東寺旧境内は、史跡教王護国寺境内の現状変更に伴う調査で、東辺築地及びその東側の遺構・遺物の埋没状況を調査するものである。

17野田遺跡は、ＪＲ向日駅の東方に位置する弥生時代から鎌倉時代にかけての集落遺跡である。職員住宅の改築に伴い発掘調査する。

18長岡京跡ほかは、名神高速道路の拡幅に伴う調査で、平成３年度は京都市、向日市及び大山崎町内で調査を予定している。長岡京の条坊関係のほか、下層・上層遺跡である向

日市鶏冠井清水遺跡、大山崎町百々遺跡、同松田遺跡、同下植野南遺跡についても調査を行う予定である。

19長岡京跡は、府道の拡幅に伴う調査で、長岡京の右京七条一坊に関する調査成果のほか、神足遺跡・勝竜寺城跡に関する調査成果にも期待が寄せられる。

20算用田遺跡は、郵便局建設に伴う調査で、近接地の調査結果によると古墳時代の竪穴式住居跡群が検出されており、古墳時代後期を中心とする集落関係の遺構・遺物が検出される可能性は高いものと判断される。

21木津川河床遺跡の調査は、下水処理施設の建設に伴い、古墳時代前期の集落遺構の検出を主たる目的として実施するものである。

22内里八丁遺跡ほかは、第二京阪道路の建設に伴い、内里八丁遺跡のほか、横穴１件（八幡市女谷横穴群）、古墳１件（田辺町口仲谷古墳群）の調査を行う。内里八丁遺跡では、弥生時代の埋没水田の調査を中心として実施する予定である。

23興戸遺跡は、国道307号バイパスの建設に伴い、古山陰道と奈良時代集落との関係の解明を主な目的として実施するものである。

24防賀川遺跡は、天井川となっている防賀川の切り上げ工事に伴う調査で、天井川の構造並びに下層の古墳時代の遺物包含層の性格を解明しようとするものである。

25樋ノ口遺跡は、平成２年度に実施した試掘調査を受けて本調査を行う。試掘調査では布目瓦片が多数採取されており、奈良時代の寺院か官衙に関する調査成果が期待される。

26堂ノ上遺跡は、椿井大塚山古墳と谷一つ隔てた北側にある台地性丘陵上にある散布地である。府道の建設に伴い試掘する。

27瀬後谷遺跡ほかは、関西文化学術研究都市建設に伴う調査で、瓦窯跡２件（瀬後谷遺跡、市坂瓦窯跡）、古墳１件（西山塚古墳）、散布地１件（西山遺跡）の調査を予定している。瀬後谷遺跡は、平成２年度の調査で奈良時代の窖窯２基が検出されており、今年度は瓦窯跡群の全面的な調査を実施する計画である。

28桑飼上遺跡は、昭和62年度から平成２年度まで掘り進めてきた同遺跡整理作業を実施するものである。

29野崎古墳群ほかは、近畿自動車道敦賀線建設に伴う調査の整理・報告を行うもので、今年度は野崎古墳群、福垣北古墳群、興遺跡、観音寺遺跡の４遺跡に関する整理・報告書刊行と三宅遺跡、小西町田遺跡の整理作業を実施するものである。

（おくむら・せいいちろう＝当センター調査第２課調査第２係長）

平成２年度京都府内埋蔵文化財の調査

辻　本　和　美

昭和56年４月に京都市上京区の河原町通りに面する仮事務所で産声をあげた当調査研究センターは、平成２年度で10年目を迎えることとなった。この間の、調査件数は、公共事業の増大に伴ってますます増大し、その中身についても年々大規模化する傾向にある。府内における発掘調査事例や調査結果についても増加の一途をたどり、個々の詳細については把握し難い状況にまで来ているのが現状である。本稿では、当調査研究センターが実施した調査を中心に主要なものを取り上げ、他の調査機関の事例については、特に重要と思われるものをトピック的に取り上げることにした。

平成２年度に、当調査研究センターが行った発掘調査遺跡は、付表１の通りである。地域・種別については付表２に掲げる。地域別にみると、丹波地域で減少し、京都南部で若干の増加傾向が窺われる。調査原因では、道路建設に伴うもの18件、公共建物建設に伴うもの10件（学校関係３件）、農地整備に伴うもの７件、広域宅地造成（関西・文化学術研究都市関連）に伴うもの３件、以下、下水道、河川改修、ダム建設に伴うものが各１件ずつであった。以上のように、調査規模の大小はあるが、本年度の傾向としては道路建設に係わる調査の増加が窺われる。

丹後地域

１こくばら野遺跡では、７～８世紀にかけての竪穴式住居跡10数基と掘立柱建物跡が検出され、８世紀前半に竪穴から掘立へと住居の形態が変遷することがわかった。

２横浦古墓・３山形古墓群のうち、前者では、近世の積石墓１基が、後者では、石組を用いた中世（13世紀）の火葬墓25基のほか荼毘跡と思われる焼けた土坑が調査され、当地域における中近世の墓制の変遷についての資料が得られた。

６左坂古墳群では、古墳時代中期から後期にかけての木棺直葬墳11基を調査した。円墳１基を除き、いずれも５～15mの小規模な方墳である。副葬品として少量の土器類や鉄製武器類が伴うほか、初期須恵器や鉄滓がみられる点は、後記する遠所遺跡の問題を含め、丹後の鉄生産を考えるうえで注意される。

７遠所遺跡群の調査は、平成元年度からの継続調査である。今回の調査では、製鉄に関

付表１　京都府埋蔵文化財調査研究センター　平成２年度発掘調査実施遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	担当者	調査期間	概　　要
1	こくばら野遺跡	集落跡	熊野郡久美浜町甲山	森島康雄	2.7.17～2.12.7	竪穴式住居跡・掘立柱建物跡
2	横浦古墓	古墓	熊野郡久美浜町栃谷	森島康雄	2.4.12～2.7.20	近世墓
3	山形古墓群第２次	古墓	熊野郡久美浜町大井	森　　正	2.4.12～2.6.14	中世墓群・茶毘跡・近世墓
4	下後古墳群	古墳	中郡弥栄町和田野	石崎善久	2.4.13～2.8.4	木棺直葬墓３基
5	大田古墳群	古墳	中郡弥栄町和田野	石崎善久	2.4.13～2.8.4	顕著な遺構なし
6	左坂古墳群	古墳	中郡大宮町周枳	石崎善久	2.8.16～3.3.7	木棺直葬墓11基・土壙・近世墓・横穴状遺構
7	遠所遺跡群	窯跡ほか	中郡弥栄町木橋	増田孝彦 岡崎研一 森島康雄 石崎善久 岸岡貴英 野島　永	2.4.3～3.3.12	製鉄炉跡・鍛冶炉跡・炭焼窯跡・須恵器窯跡・竪穴式住居跡
8	杉末遺跡	散布地	宮津市杉末	柴　暁彦	2.5.24～2.6.13	顕著な遺構なし
9	宮津城跡第８次	城跡	宮津市鶴賀	森島康雄	2.12.17～3.2.15	建物跡・柱列・井戸
10	内和田古墳群	古墳	与謝郡加悦町明石	森　　正	2.7.17～2.10.19	木棺直葬墓２基・銅鏃
11	蔵ヶ崎遺跡	集落跡	与謝郡加悦町明石	森　　正	2.11.5～3.3.13	溝跡・弥生前期土器・ノミ型石器・炭化米
12	田中西遺跡	散布地	舞鶴市泉源寺	野島　永	2.10.1～2.10.30	顕著な遺構なし
13	桑飼上遺跡	集落跡	舞鶴市桑飼上	細川康晴 岸岡貴英	2.4.3～3.3.5	竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝・方形周溝墓
14	荒堀遺跡	散布地	天田郡夜久野町大油子	野島　永	2.11.26～3.2.14	土坑・柱穴
15	里遺跡	集落跡	綾部市里	田代　弘	2.4.24～2.6.20	掘立柱建物跡・溝
16	蒲生遺跡	集落跡	船井郡丹波町蒲生野	田代　弘	2.9.17～2.11.8	掘立柱建物跡
17	川向古墓	古墓	船井郡園部町小山東	田代　弘	3.1.17～3.2.22	顕著な遺構なし
18	川向北１号墳	古墳	船井郡園部町小山東	田代　弘	3.1.17～3.2.22	横穴式石室墳・測量調査
19	八木嶋遺跡第２次	集落跡	船井郡八木町八木嶋	鵜島三寿 柴　暁彦	2.4.17～3.3.7	竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・河川跡・中世墓井戸・柵列
20	塚本古墳	古墳	船井郡八木町神吉	引原茂治	2.5.23～2.7.10	一辺36m方墳・二重周溝・埴輪・木製品
21	天若遺跡	集落跡	船井郡日吉町天若	三好博喜	2.8.6～3.1.30	竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡
22	平安宮跡	都城跡	京都市上京区	引原茂治	3.3.4～3.3.7	大極殿院北廊跡・表土掘削のみ・継続調査
23	平安京跡	都城跡	京都市上京区	引原茂治	2.8.7～3.1.14	西洞院大路跡・溝跡・井戸跡・土坑・茶陶
24	京大北部構内遺跡	散布地	京都市左京区北白川	三好博喜	2.4.23～2.6.11	顕著な遺構なし
25	伏見城跡	城跡	京都市伏見区	柴　暁彦	2.11.7～3.2.27	礎石建物跡・土塀跡・井戸跡
26	長岡宮跡宮内第250次	都城跡	向日市寺戸町	竹井治雄	2.11.13～3.3.2	溝跡
27	長岡京跡左京第241次 長岡京跡左京第242次	都城跡 都城跡	京都市伏見区 向日市上植野町	竹井治雄 石尾政信 黒坪一樹 中川和哉	2.4.9～3.3.6	条坊側溝跡・旧河道・耕作溝
28	長岡京跡左京第216次	都城跡	長岡京市神足	戸原和人	2.4.4～2.6.25	雲宮遺跡・環濠跡
29	長岡京跡右京第357次	都城跡	乙訓郡大山崎町	戸原和人	2.7.4～3.2.20	竪穴式住居跡・石敷溝
30	長岡京跡右京第349次	都城跡ほか	乙訓郡大山崎町	岩松　保	2.4.9～3.3.8	竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・西国街道側溝
31	長岡京跡左京第252次	都城跡	向日市上植野町	中川和哉	2.8.6～2.12.21	東一坊第二小路側溝・礎石建物跡
32	長岡京跡右京第363次	都城跡	長岡京市友岡	小池　寛	2.10.22～3.1.25	溝跡・井戸跡
33	百々遺跡	官衙跡	乙訓郡大山崎町円明寺	竹井治雄 黒坪一樹	2.5.21～2.6.26 2.8.22～2.8.29	西国街道側溝
34	内里八丁遺跡	集落跡	八幡市内里	竹原一彦	2.4.10～3.2.27	弥生水田跡・稲株跡・溝・掘立柱建物跡

番号	遺跡名	種別	所在地	担当者	調査期間	概　要
35	興戸遺跡第８次	集落跡	綴喜郡田辺町興戸	伊野近富	2.4.24～2.12.20	掘立柱建物跡・井戸跡
36	樋ノ口遺跡	散布地	相楽郡木津町山田 相楽郡精華町山田	伊野近富	3.3.4～3.3.7	試掘調査
37	燈籠寺遺跡第４次	集落跡	相楽郡木津町燈籠寺	黒坪一樹	2.11.6～3.1.22	方形周溝墓・溝・土坑
38	瓦谷遺跡	集落跡	相楽郡木津町市坂	石井清司 伊賀高弘	2.4.5～2.12.20	流路跡
39	瓦谷古墳	古墳	相楽郡木津町市坂	伊賀高弘	2.6.11～2.10.30	古墳前期円墳・粘土槨・鏡・埴輪
40	瀬後谷遺跡	窯跡	相楽郡木津町市坂	石井清司 伊賀高弘	3.1.7～3.3.6	瓦窯跡２基
41	八後遺跡第２次	散布地	相楽郡木津町木津	石井清司	2.10.29～2.11.29	顕著な遺構なし

上表調査遺跡掲載文献　8・15・20・24・34（京都府遺跡調査概報第41冊）、12・16・21・33・35（同42冊）、9・14・26・31・32・37・41（同43冊）、2・3・4・5・25（同44冊）、22（同45冊）、3・8・15・24（京都府埋蔵文化財情報第37号）、2・4・5・19・20・34・39（同38号）、1・7・10・12・16・31・32・35・37（同39号）・6・9・11・13・14・21・25・26・28（同40号）

係した一連の遺構が確認されその実態が明らかになりつつある。検出遺構としては、精練及び鍛練鍛冶炉と思われる製鉄炉跡19基、炭窯跡200基以上、砂鉄埋納土坑等の製鉄関連遺構をはじめ、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡等・須恵器登窯跡等がある。製鉄の操業時期は、６世紀後半と８世紀後半の２時期に中心を置くものと想定されるが、一部炭窯の築造時期や伴出土器の時期からみて、５世紀末ないし６世紀初頭に遡る可能性も残されており、丹後地域のみならず、わが国の製鉄の歴史を考えるうえで重要な問題を提起する。

９宮津城跡は、細川氏によって築城された近世城郭である。今回の調査では、17世紀後半の礎石建物跡、柵、井戸、水路跡等が検出され、武家屋敷の一端を知る貴重な資料となった。

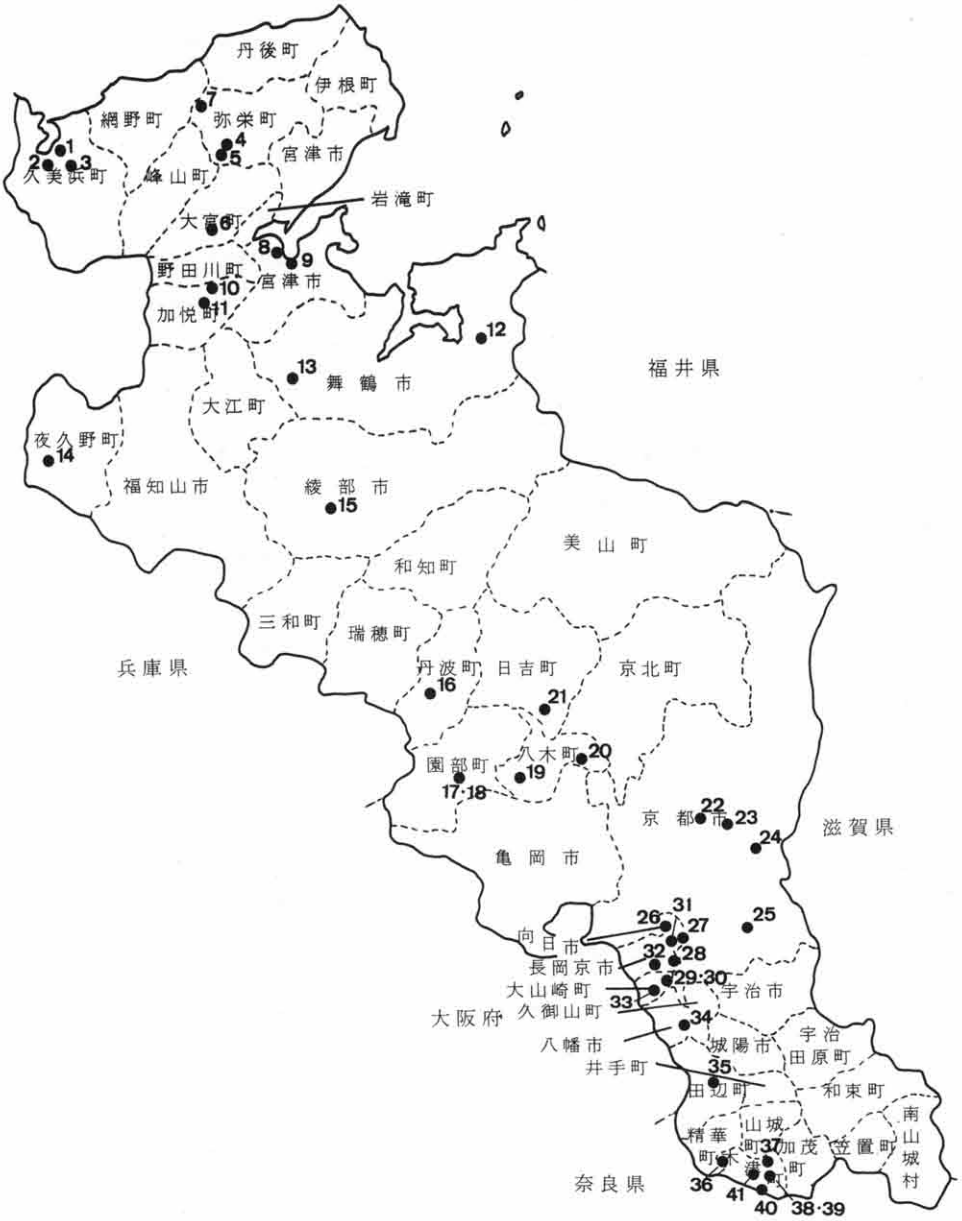
10内和田古墳群は、17基の小規模古墳からなるが、今回、丘陵先端部に位置する２基の調査を行った。このうち、５号墳は地山を削り出した、一辺12m×15mのいびつな長方形状を呈し、墳頂平坦部から弥生時代後期前半～古墳時代初頭にかけての14基の土壙墓が検出された。少量の鉄製武器類のほか、墓上祭祀に用いられた土師器壺・器台が副葬されており、４号墳から古墳時代前期の銅鏃２本が出土した。

11蔵ヶ崎遺跡は、従来から丹後地域では数少ない弥生前期の遺跡として知られていたが、今回、丘陵裾を走る道路建設に伴う調査によって同時期の遺物が多量に出土した。遺物は、丘陵裾を巡る長32m・幅1.2mの溝内から出土し、綾杉文を施す壺等の土器類のほか、炭化米や木製品がある。また、朝鮮半島製と思われる、長さ18cmの鑿型磨製石斧が1点出土した。次年度の調査が期待される。

13桑飼上遺跡の調査は、今年度で４年目をむかえ現地調査の最終年度にあたる。遺構面は上下２層からなり、主要な検出遺構としては、上層では、７～８世紀の方形竪穴式住居跡６基・土器溜まり、下層では、弥生時代中期の円形竪穴式住居跡３基・方形竪穴式住居跡２基・方形周溝墓１基等がある。出土遺物には、各時代の土器や石器類が多数みられる

が、特に、碧玉原石・石鋸・砥石・管玉(未製品を含む)等の弥生時代の玉造りに関係する遺物が認められ、本集落内での製作過程が窺われる。

丹後ではこのほか、網野町浜詰遺跡から縄文時代後期の土器が大量に出土した。また、離湖古墳から、5世紀後半の長持形石棺の底石、峰山町大耳尾(おみお)古墳群の2号墳(5世紀末～



平成2年度　発掘調査実施遺跡位置図

付表２　地域・種類別調査遺跡集計表

地域	集落跡	散布地	古墳・古墳群	都城跡・官衙跡	城跡・城館跡	古墓・経　塚	窯 跡 ・生産遺跡	小　計
丹　後	3	2	4		1	2	1	13
中　丹	1	1						2
南　丹	3		2			1		6
京都市		1		2	1			4
乙　訓				8				8
山　城	4	2	1				1	8
合　計	11	6	7	10	2	3	2	41

６世紀前半の円墳）から装飾付瓶と、府内では初めての須恵器角杯形土器が出土した。宮津市と野田川町にまたがる霧ヶ鼻古墳群では、６世紀後半期の竪穴系横口式石室墳と木棺直葬墓の群集墳の調査があった。国史跡の加悦町蛭子山古墳では、後円部頂上の平坦部から、鶏形土製品とともに木柱柱穴が検出され鳥居の原形として話題になった。また、加悦町では、鳴谷東古墳群の調査があり、３号墳から墳丘を方形に巡る埴輪列・葺石及び埋葬施設が確認された。

中丹地域

15里遺跡では、今回調査地の南端から平安～鎌倉期の幅約2.6m・深さ約１mの溝を確認した。内部から須恵器、瓦器のほか墨書木札が1点出土した。溝は防御的な性格を持つと考えられる。

福知山市では、下山古墳群で横穴式石室墳の調査が行われた。

南丹地域

19八木嶋遺跡は、今回8,000㎡を対象とする大規模な調査になった。主な検出遺構としては、古墳時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・河川跡をはじめ、奈良～中世にかけての掘立柱建物跡・墓地跡・溝跡等がある。調査地の北半部で検出された６世紀末～７世紀前半の掘立柱建物跡群は、総数約40棟に及び、各々の建物規模も大きく、配置等にも規則性が認められる。特に、中心的な位置を占める建物跡は、東西棟で身舎７間×３間で四面に廂を持つ。これらは、柵列や溝に画されていたものとみられ、最近、各地で類例が増えつつある豪族居館跡と考えられる。また、調査地南側の流路跡では、６世紀後半期の多量の土器類に伴って農工具等の木器やしがらみ跡が見つかった。溝の上層からは、多量の墨書土器が出土しており、歴史時代にも何らかの公的機関が存在した可能性がある。

20塚本古墳は、ほ場整備に伴い京都府教育委員会と共同で調査を行った。一辺36mの方

墳で周囲に濠を巡らし、特に、北側と東側には、二重に巡らすことが判明した。埋葬部は開墾のためすでに削平されていたが、周濠内からは墳丘から転落したとみられる円筒埴輪が多数出土した。埴輪には馬や鹿の絵が線刻されているものがあり、また、径30cmを測る笠形の木製品が１点出土した。築造時期は、５世紀後半で、山間の小盆地という立地点についても注意される。

21天若遺跡は、昨年度の試掘調査に続き、約2,000㎡の面的調査を行った。この結果、６世紀前半の竪穴式住居跡５基、奈良～平安時代の掘立柱建物跡６棟以上、飛鳥時代の井戸跡１基を検出した。このほか、表採品であるが、旧石器が認められている。遺跡は、桂川の最上流域に位置するが、今回検出した建物については木材運搬の基地的な性格が想定される。今後、継続調査が予定されており、その成果が期待される。

本年度最も注目された調査の一つである園部町黒田古墳は、前方部がバチ形に開く全長約51mの前方後円墳状を呈し、円丘下に設けられた、礫床に長大な割竹形木棺を置く埋葬主体部から、「君宜官　位至三公」銘双頭竜文後漢鏡等の副葬品が出土した。墓壙上から出土した土器片は庄内期の特徴を持ち、弥生時代から古墳時代への移行期（３世紀後半～４世紀初頭）の墳丘墓と考えられている。

京都市内

22平安京跡の調査は、府庁構内の庁舎建設に伴うものである。一昨年度にも今回調査地の南側で調査を実施し西洞院通（大路）の側溝を検出しているが、今回もその延長が確認され、中近世の道路変遷や当地の利用のあり方が明らかになった。調査地の西隣りには、江戸時代初期、豪商茶屋四郎次郎邸があったとされるが、今回調査でも、織部等の近世高級茶陶や中国製赤絵磁器、李朝白磁鉢が多数出土しており、その関係が注目される。

25伏見城跡の調査地は、町名から戦国武将毛利氏の屋敷跡と推定されるところで、今回調査では、礎石建物跡・敷石遺構・築地塀跡・井戸跡のほか、火災の跡を留める整地層が検出された。出土遺物には、土師器・陶器・瓦類のほか、金箔瓦・鯱瓦など安土桃山時代の趣向が窺える資料が出土した。

そのほか、京都市内では、左京区の北白川廃寺跡下層（上終町遺跡）から、山形押型文を伴う縄文時代早期の竪穴式住居跡が、右京区大原野南春日町の下西代古墳群から、横穴式石室内に小石室を付け加えた二重構造を持つ６世紀末～７世紀初頭の円墳１基が見つかった。平安京跡に関しては、上京区丸太町で朝堂院回廊の北東隅基壇の一部が、また中京区から、神泉苑の園池跡の一部と神泉苑の刻印のある瓦が初めて確認された。右京区西院では、平安時代前期の木製桝が、同じく西院追分町では、一町四域を占める平安初期の貴族

の邸宅跡が確認された。左京区の法住寺殿跡では、築地塀跡と側溝跡、下鴨神社境内の国史跡「糺の森」では室町時代の川跡が見つかった。中京区壬生寺境内からは、池跡と鎌倉時代の被災を示す大量の焼けた瓦が、昨年度から行われている京都市中京区三条通りの豪商邸宅跡からは、織部・志野・唐津焼等の約2,500点にのぼる桃山時代の高級茶陶が出土した。東山区の平家ゆかりの六波羅跡からは、檜材を用いた長さ４ｍの巨大な井戸枠が出土した。

乙訓地域

長岡京跡を縦断する中央自動車道西宮線（名神高速道路）の拡幅工事に伴う発掘調査は、昭和63年度から実施しており、今年度も各所で調査を行った。

30大山崎工区（左京第349次調査）では、平安時代前期の西国街道の東西両側溝と弥生時代後期の竪穴式住居跡５基、奈良時代の掘立柱建物跡を検出した。

29大山崎町（左京第357次調査）では、古墳時代中期～中世の遺構・遺物を確認した。古墳時代の遺物には、革袋形の須恵器や勾玉、円筒埴輪等がある。中世に関する遺構としては、久我畷の側溝がある。今回の調査では、朱雀大路西側溝の検出を期待したが、初期の目的は達せられなかった。

28長岡京市（左京第216次調査）では、弥生時代前期の雲宮遺跡の環濠と推定できる２条の大規模な溝及び柵跡を検出した。溝内からは、前期中段階に属する土器類とともに彩色された壺や木製高杯の杯部・木製鍬未製品・猪下顎骨等が出土した。周辺地形からみて、環濠は長径約100ｍの卵形をした平面形を持つことが想定される。

27向日市から京都市にまたがる左京第241・242次調査地では、長岡京期の掘立柱建物跡のほか、三条条間小路南北両側溝、東二坊大路東側溝等条坊に関する遺構を検出し、三条条間小路が大路幅を持つことが再確認された。下層からは、古墳～奈良時代にかけての流路跡や弥生時代の鶏冠井清水遺跡に関係する遺物包含層が確認された。

31長岡京跡左京第252次調査では、昨年度北側で行った調査に続き、東一坊第二小路東西側溝の延長を確認した。今回の調査では特に、平安時代の掘立柱建物跡が４棟が検出され、緑釉陶器・瓦磚類・凝灰岩切石等、京内では例の少ない遺物が出土した。軒瓦には、小形の平・丸瓦の他、平安京の官窯とされる大阪府吉志部瓦窯や京都市西賀茂角社西群瓦窯と同一の製品が認められ、長岡京遷都後、この地域に中央と直結した人物の邸宅跡や家政機関が存在したことが窺われる。

乙訓地域では、本年度も多くの調査があった。向日市中海道遺跡では、旧石器の細石刃が、同鶏冠井遺跡では弥生中期の川跡や竪穴式住居跡群が、また森本町の高田遺跡から側

溝を伴う弥生時代の道路跡が長さ約30mにわたって見つかった。長岡京市の雲宮遺跡からは縄文時代晩期末の大形土偶が見つかった。同市今里車塚古墳の第７次調査では、これまで通り後円部外周を取り巻く木柱が出土した。長岡京跡関係では、向日市上植野町車返から宮域南面の東一坊大路の西端に沿う築地跡、同市北山では、大型井戸跡が出土した。条坊跡については、向日市で東二坊大路東側溝と8.5mの路幅を持つ二条第一小路が初めて確認され、条坊制解明の手掛かりが得られた。鴨田遺跡でも四条条間小路北側溝が見つかり、大路の規模を持つことがわかった。なお、同遺跡では、弥生前期の土器類が多量に出土した。長岡京市開田二丁目では、西一坊大路と五条大路の交差点及び宅地跡が調査され、八花硯が出土したほか、同市神足木寺町では、六条大路北側溝から、全国で７例目の「迷子捜し」の告知札が出土した。京都市伏見区水垂の長岡京跡調査地では、完形に近い墨書人面土器が約200点出土し話題になった。このほか、長岡京市今里城跡では、室町時代の領主能勢氏に係わる人名入り木簡が発見された。

南山城地域

34内里八丁遺跡では、府内では４例目の水田遺構が検出された。水田跡は、20～40cmの畦畔によって区画され、現在42枚分が確認できる。各水田は9～34㎡と比較的小規模で、水田面と畦畔上には、多数の稲株痕跡が認められた。株跡の状況から棒状のものを用いた密植の田植えが行われたとの考え方もあるが不確定である。水田遺構の時期は、弥生時代後期後半に属するが、この下層にも水田遺構の存在が確認されており、次年度の調査が期待される。なお、上層の古墳時代前期方形周溝墓から、内面が中空の鶏形土製品が出土している。

35興戸遺跡では、奈良～平安時代を中心とする掘立柱建物跡数棟のほか、井戸跡２基・溝を検出した。井戸跡の１基には、一本の巨木をくり抜いた円形井筒が使用されていた。これらの遺構は、古代山陽道または山陰道に想定される、調査地西側の山麓を走る現府道八幡木津線に並行ないし直交しており、一定の地割に基づいて配置されたことが窺われる。出土遺物には、緑釉陶器・製塩土器・墨書土器・硯・銅銭・斎串等がみられるなど、一般集落とは異なった性格が与えられ、これまで説かれてきたように綴喜郡衙跡の候補地として有力になってきた。

38瓦谷古墳は、奈良県境に近い平城山の丘陵先端部に位置する。直径約30m前後の円墳で、墳丘頂部と裾部分に埴輪を巡らす。円筒埴輪には鰭付きのものが見られ、また、盾形埴輪に施された直弧文は、古い形態を留める。墳丘頂部に南北に主軸を置く２基の埋葬施設が並ぶ。西棺は、長さ７m以上・幅2.5mの粘土槨、東棺は、長さ６m以上・幅1.8mの

付表３　平成２年度現地説明会実施遺跡一覧

平成２．６．２	遠所遺跡群	平成３．１．19	内里八丁遺跡
8.24	瓦谷古墳	1.19	桑飼上遺跡
9.29	内和田古墳群	2.15	八木嶋遺跡
11.22	長岡京跡左京第252次	2.20	伏見城跡
11.28	平安京跡	2.22	左坂古墳群
11.29	こくばら野遺跡	3．2	蔵ヶ崎遺跡
12.18	天若遺跡	3．2	長岡京跡右京第349次
12.20	興戸遺跡		長岡京跡右京第357次

木棺直葬である。両棺とも盗掘を受けていたが、細線式四獣形鏡をはじめ鉄製武器・武具・工具類・碧玉製鏃形石製品・竪櫛等豊富な副葬品が遺存した。東棺では、菱形の綾織り文を施す有機質製漆塗靫が残存した。古墳の築造時期は、甲冑類に方形板革綴短甲と小札革綴冑という古いタイプの型式が認められることや、埴輪及び他の副葬品の内容から、４世紀後半の早い時期に比定でき、粘土槨・木棺直葬の順に埋葬されたことがわかる。

40瀬後谷遺跡では、丘陵裾の水田部分と接する位置から、奈良時代の前期に属する瓦陶兼窯跡を３基検出した。このうち２基は、丘陵斜面をくり抜く有段有階式の登窯である。焼成部床面の段は丸瓦により構築されており、数回の補修が窺える。共伴する軒丸瓦は、平城宮Ⅰ期に編年できるもので、初期の平城宮造営に係わる瓦窯と判断される。調査は次年度も継続して実施される予定である。

このほか、宇治市の平等院では、鳳凰堂を取り囲む阿字池周辺の調査で創建時の州浜が、同市木幡の浄妙寺跡からは、平安時代、藤原道長が建立した三昧堂と多宝塔とみられる堂塔跡の基壇が見つかった。同じく宇治市街遺跡の茶師屋敷跡から安土桃山時代の織部焼沓形茶椀等、高級茶陶が多量に出土した。山城町車谷古墳群では、６世紀初頭に遡る横穴式石室墳を含む６基の古墳が調査され、また白鳳の金銅釈迦仏で著名な蟹満寺境内から金堂跡と思われる大規模な瓦積基壇が見つかった。加茂町恭仁宮跡の調査では、宮の南面大垣跡と山城国分寺跡の西辺築地塀跡が検出された。

冒頭でも記したように、２年度には設立10周年を記念して、特別展や講演会の開催、論集刊行等の事業を行ってきた。今後も、日々の業務やさまざまな機会を通じ、多くの方々に、埋蔵文化財への関心と保護についてご理解・ご協力を得られるよう努力して行きたい。

（つじもと・かずみ＝当センター調査第１課資料係長）

宮津城跡第８次の発掘調査

森　島　康　雄

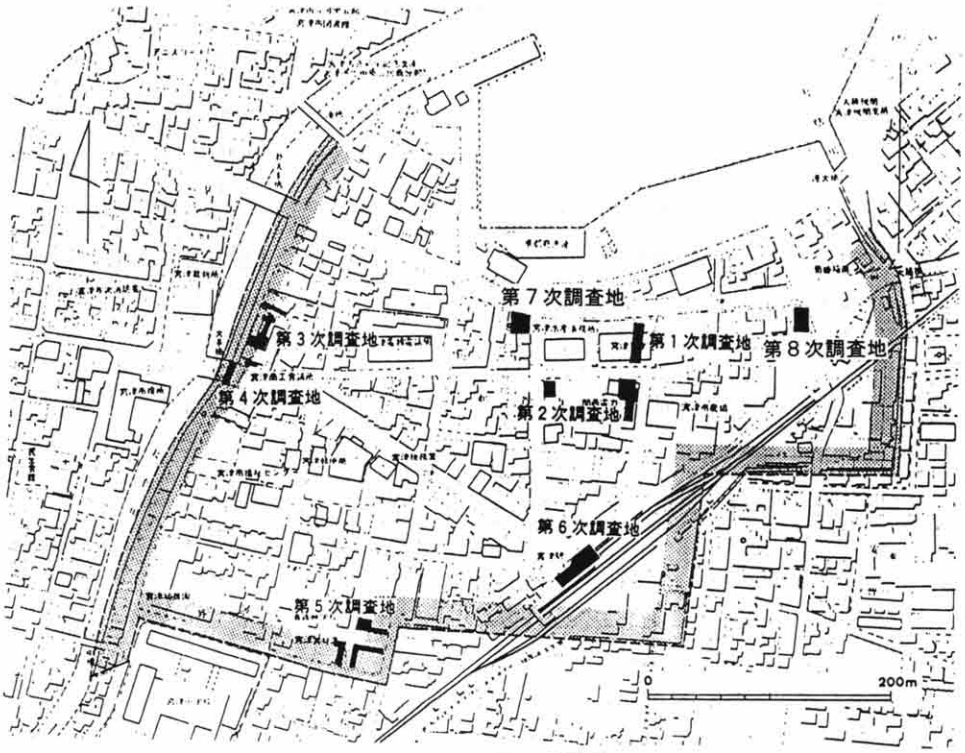
１．はじめに

今回の調査は、宮津湾流域下水道ポンプ場建設工事に伴い、京都府土木建築部宮津湾流域下水道建設事務所の依頼を受けて行ったものである。調査地は、大膳橋から約80m西寄りの宮津市鶴賀地内に位置する。調査期間は、平成２年12月19日から平成３年２月15日までで、約180㎡を調査した。現存する絵図によると宮津城本丸の北東に広がる三ノ丸の一角にあたると考えられ、武家屋敷に関連する遺構の存在が予想された。

２．調査概要

（１）検出遺構（第２図）

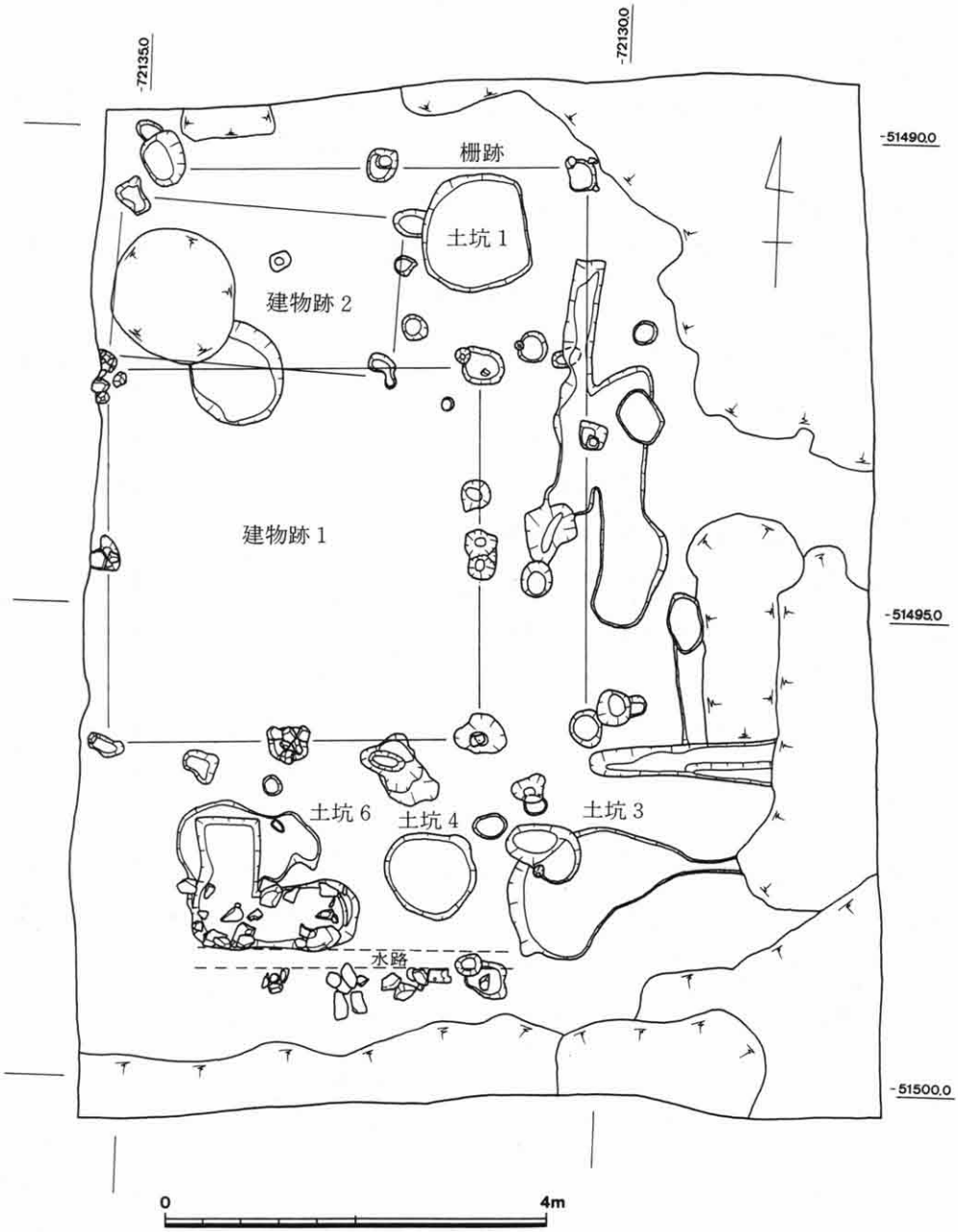
調査の結果、地表下約1.2mと約1.4mで遺構面を検出し、それぞれ第１遺構面、第２遺



第１図　調査地位置図

構面とした。第２遺構面では顕著な遺構が検出されなかったので、ここでは、第１遺構面の主な遺構を取り上げる。

建物跡１　調査区中央部西寄りで検出した礎石建物跡である。東西・南北とも２間分を検出している。建物跡の主軸方向は真北より約２°西に振る。１間の長さは約195cmを測るので、検出した範囲の建物跡の大きさは東西・南北ともに約3.9mを測る。柱は、直径30～



第２図　第１遺構平面図

50cmの浅い穴を掘り、粘質土を数cm入れた後、砂と直径10～15cmの根石を置いている。この上に礎石を置いたものと思われるが、明らかに礎石と認められる石は残っていなかった。これはさらに大きな建物の一部であると思われる。

建物跡２　調査区北西部で検出した小規模な建物跡である。建物跡１に後出する。東西・南北とも１間分を検出しているが、柱間は、東西が約297cmと長く、南北は約166cmを測る。主軸方向は真北より、約３°東に振る。柱の据え方は建物跡１と同様であるが、根石の大きさが10cm足らずであり、建物跡の規模の小さいことを反映しているのであろう。

柵跡　建物跡１の西と北を囲むように検出した。軸は建物跡１と一致する。柱の据え方は、根石を入れずに礎石を据えているものがあるなど、建物跡に比べて簡略である。

土坑１　調査区北寄りで検出した。平面形は直径約1.2mの不整円形で、深さ約40cmを測る。壁がほとんど垂直であることなどから井戸かと考えたが、この場所の湧水は海水のため、貯水等のための容器を据えた土坑と考えた。埋土は灰青色砂の単一層で、埋土中からは、桟瓦、肥前陶磁器、ガラスなどが出土した。幕末～明治時代の遺構であると考える。

土坑３　長径80cm・短径55cmを測る楕円形の土坑である。北西側半分が１段深くなっている。埋土は暗灰色砂で、少量の炭を含む。回転台成形の土師器皿がまとまって出土したが、完形になるものはなく、破損品を廃棄した土坑とみられる。このほか、肥前陶器の小片が出土している。17世紀中葉～後葉の遺構と考えられる。

土坑４　直径約95cmの円形の土坑である。深さは約25cmを測る。直径５cm程の円礫が多量に詰まる。遺物は呉須赤絵鉢の小片が出土したにすぎない。遺構の性格は不明である。

土坑６　不定形の土坑である。深さは最も深いところで約30cmを測る。底は２段になっており、下段の平面形は「L」字状を呈する。ふたつの土坑が切り合っている可能性も考えられるが、湧水が著しいこともあって、平面・断面ともに確認できなかった。丹波焼すり鉢、瓦、小動物の骨が出土している。

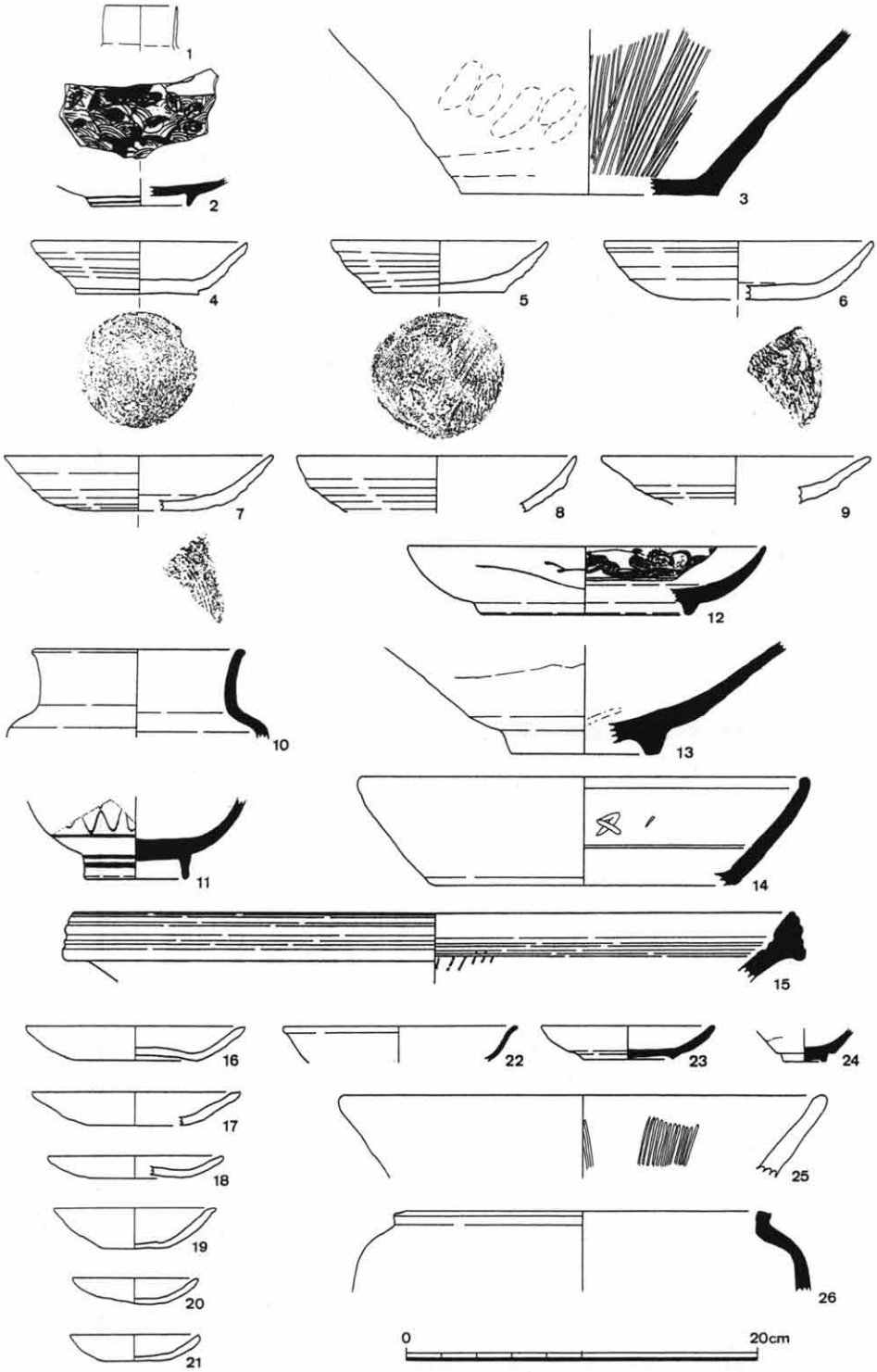
水路　調査区南端部西寄りに、石列が２列、約25cmの間隔で東西方向に並んでいるところがあり、水路と考えた。南側の石列には、瓦当のはずれた軒丸瓦も利用されている。

（２）出土遺物（第３図）

ａ．遺構出土の遺物

土坑１　１はガラスである。直立する口縁部から斜め下方にふくらむ体部を持つものと思われる。ランプの火屋（ほや）ではないかと考えられる。

土坑３　回転台成形の土師器皿が６個体分出土している。底部は回転糸切りで、成形時の回転ナデによる凹凸が口縁端部付近まで明瞭なもの（４・５）と、口縁部のヨコナデの幅が広く凹凸の不明瞭なもの（６～９）がある。前者は底部がやや突出し平高台風になってお



第３図　出土遺物実測図

り、焼成が甘いのに対して、後者は口縁部からなめらかに底部にいたり、焼成も良好である。この両者の違いは、時期差を示すものかもしれない。

土坑６　３は丹波焼すり鉢である。７条を単位とするすり目がかなり蜜に施され、底部内面にもすり目が見られる。底部外面は離れ砂を用いている。胎土には石英等の礫を多く含んでいる。

ピット４　２は青花皿である。畳付はヘラで釉薬を掻き取って露胎としているが、一部に砂が付着している。内底面には青海波と枝葉が描かれている。

ｂ．茶褐色砂層（第１遺構面上層の包含層）出土遺物

10～12は肥前磁器である。10は白磁壺で、白色の胎土にやや青みを帯びた釉薬を掛けている。口縁端部は露胎である。11は染付椀、12は染付皿である。ともに、畳付は露胎で、12の見込みには蛇の目に釉剥ぎが行われている。13は肥前陶器鉢である。体部下方に回転ヘラケズリが施されている。茶赤色の胎土で、内面全面と外面上半部に白色の釉薬を掛けている。内面には砂胎土目が見られる。14は丹波焼盤である。茶褐色の胎土で内面には斑点状の自然釉が付着している。体部内面にヘラ記号が見られる。15は丹波焼すり鉢である。口縁端部が外側に肥厚し、断面形は三角形を呈する。破片が小さくて判然としないが、すり目は櫛描きであると思われる。この層には19世紀代までの遺物が含まれている。

ｃ．暗茶褐色砂層（第２遺構面上層の包含層）出土遺物

16～21は土師器皿である。16・19は内面の立ち上がり部分に、ヨコナデによる凹みが見られるもので、17はこれらより器壁が薄く、やや古い要素をもっている。色調は16と21が乳黄色、19と20が乳白色、17と18が乳橙色である。21は完形である。22は中国製の白磁皿である。23は瀬戸・美濃焼の灰釉皿で、高台内に輪トチンが釉着している。24は瀬戸・美濃焼の小形天目茶椀である。体部下半以下は露胎でサビ釉は施されていない。25は土師質焼成のすり鉢である。胎土は乳白色で細かいが、直径５㎜程の礫も数個入っている。すり目は12条単位の櫛描きで施されている。26は丹波焼短頸壺である。口縁内端部がすり減っており、蓋をして用いていた痕跡と思われる。これらは16世紀末までの遺物である。

３．まとめ

今回の調査による成果を、既往の調査成果なども参考にして簡単にまとめてみたい。

まず、第１遺構面で検出された遺構について考える。建物跡１と柵跡及び水路は主軸ラインが一致することから、同時に存在したと考えられる。時期は、出土遺物が乏しく確定できないが、層位から見て、第１遺構面の遺構は京極氏による再建以後の生活面であることは確実である。下限は、同一面で検出された土坑１の示す幕末～明治時代までが考えら

れるが、水路に転用されていた軒丸瓦(27)を重視すれば18世紀前半までと考えて大過なかろうと思われる。これらの遺構は現存する絵図から見て、武家屋敷の一部と推定される。

第１遺構面の建物跡１は２間×２間分が検出されたが、柱間の寸法は約195cmで、１間＝６尺５寸のいわゆる京間の柱間が採用されていることが判明した。宮津城跡のこれまでの調査では、建物跡の検出例が少なく類例に乏しい。第３次調査で検出された建物跡ＳＢ0645と報告されている２間分の柱列は南に縁を持つ建物跡の一部と考えられる。この主屋部分の柱間が約２ｍ弱を測り、今回検出された建物跡の柱間と一致するといえそうである。一方、第２次調査西区で検出された２基のピット間の距離は約5.4mで、１間＝６尺として３間にあたる。建物跡１と第３次調査のＳＢ0645はどちらも回転台成形の土師器皿出現以降の遺構であるが、第２次調査のピットは時期不明である。『大坂城跡Ⅲ』(注1)では、堺市百舌鳥の高林家住宅や大坂城の例を挙げて、近世初頭には１間＝６尺５寸がある程度一般化していたことが窺われるとしている。宮津城跡で見られる一間の長さの違いが時期差によるものかどうかは、今後の資料の蓄積を待たなければならないだろう。

建物跡１と柵跡１の主軸ラインは一致し、Ｎ－２°－Ｗを測り、水路の方向はこれに直交する。この方向が、宮津城三ノ丸東側の設計計画ラインになる可能性が考えられるが、三ノ丸の西側を画す内堀の西側石垣が検出された第１次、第２次調査では、石垣の方向はそれぞれ、Ｎ－20°－Ｅ、Ｎ－10°－Ｅと報告されており、これら相互の整合性が今後問題となるところである。

調査区北東部の第２遺構面直上では厚さ約５cmの炭層が検出され、炭層からは土師器皿などが出土している。小破片のため実測できないが、それらは、暗茶褐色砂層出土のものと同じ特徴を持ち、16世紀末までのものと考えられることから、この焼土層が、慶長５年の細川氏による自焼の際に形成された可能性を指摘することもできよう。いずれにしても第２遺構面で検出した遺構が細川氏時代の遺構であることは確実である。しかし、建物などを復原することができないので、この場所が城内であったかどうかも含めて、遺構の性格は不明と言わざるをえない。

また、第２遺構面及び炭層を覆っていた明灰黄色砂層は、自然堆積層であると思われ、調査地付近は江戸初期に洪水による被害を受けたことが推定される。

このように、今回の調査では、調査面積が狭かったにもかかわらず、多くの成果を挙げることができた。この成果は宮津城の歴史を復原するうえで貴重な資料となると考える。

（もりしま・やすお＝当センター調査第２課調査第１係調査員）

注１　『大坂城跡Ⅲ』(財)大阪市文化財協会　1988

桑飼上遺跡の発掘調査

岸　岡　貴　英

1．はじめに

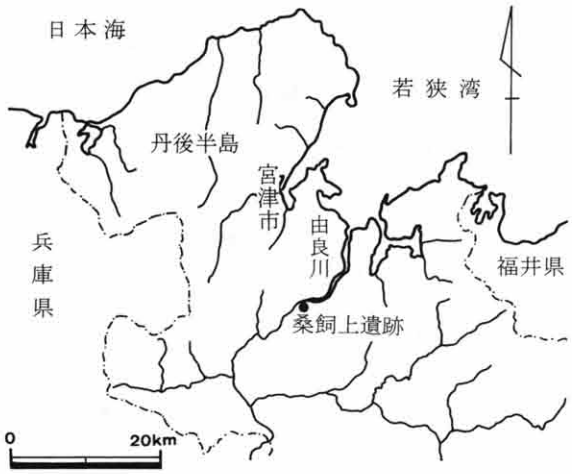
桑飼上遺跡は志高遺跡や桑飼下遺跡といった由良川下流域に連なる自然堤防上にある遺跡のひとつである。この調査は由良川河川改修工事に伴い、建設省近畿地方建設局の依頼をうけて実施した。平成２年度は本調査（面的な調査）としては３年目に当たり、調査対象地域内でもっとも上流部分（対象面積4,000㎡）を調査した。これにより、試掘調査を含む４年間の調査で、由良川縁辺部の東西600～700ｍを調査したことになる。

2．調査概要

今回の調査では、上層（飛鳥～奈良時代）で掘立柱建物跡・竪穴式住居跡・土器溜り・古墓などを、下層（弥生時代）で竪穴式住居跡と方形周溝墓などを検出した。上層遺構面と下層遺構面のレベル差は約１ｍある。

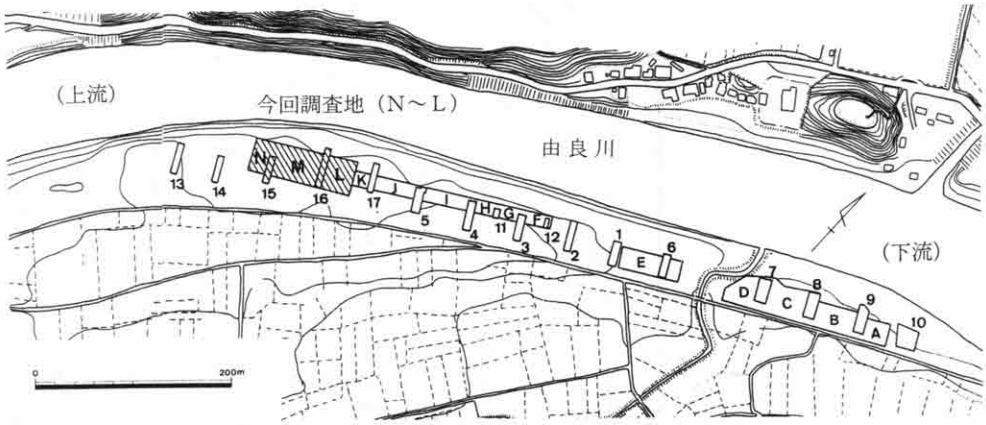
①下層遺構面の調査（弥生時代）

弥生時代の遺構には、方形周溝墓２基・竪穴式住居跡11基・土坑・ピット等がある。



第１図　遺跡所在地

方形周溝墓はＬトレンチの北東部分にみられる。これらは一辺９～10ｍの規模をもつ。主体部は墳丘の中央で各々１基しか確認していないので、基本的に単葬であったと思われる。これらの残存状況はかなり悪く、墳丘が存在したかどうかはわからない。また、確認できた例は２基のみであるが、他に方形にめぐる溝を数本確認しており、さらに数基存在した可能性がある。方形周溝墓群は前回調査地のＫ



第２図　調査地配置図

付表１　下層竪穴式住居跡一覧表

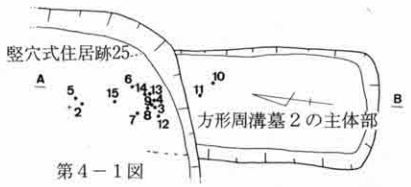
遺　跡　名	規模（東西×南北）	出　土　遺　物
竪穴式住居跡24	4.0m×4.4m	弥生土器（第Ⅳ様式）
竪穴式住居跡25	2.6m×2.8m	弥生土器（第Ⅴ様式）
竪穴式住居跡26	7.1m（直径）	弥生土器（第Ⅲ様式）・石斧・石皿
竪穴式住居跡27	6.9m（直径）	弥生土器・石錐・管玉（２点）
竪穴式住居跡28	8.2m（直径）	弥生土器（第Ⅳ様式）石斧・石皿
竪穴式住居跡29	2.8m×3.0m	弥生土器
竪穴式住居跡30	9.5m（直径）	弥生土器（第Ⅳ様式）
竪穴式住居跡31	9.4m（直径）	
竪穴式住居跡32	5.4m（直径）	弥生土器
竪穴式住居跡33	5.6m×3.6m	土師器
竪穴式住居跡34	5.4m×2.6m	

トレンチでは検出されていないことから、より北側に広がっていた可能性がある。

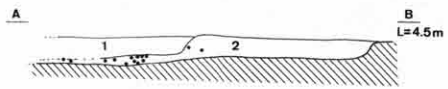
方形周溝墓１　３方向に溝を確認した。主体部は竪穴式住居跡27の埋土を切り込む。埋葬施設としては隅丸長方形の墓壙(1.5m×2.5m)に長方形の木棺痕跡(0.7m×1.8m)を確認した。出土遺物はない。

方形周溝墓２　２方向に溝を確認している。主体部は北側を竪穴式住居跡25に切られている。埋葬施設は隅丸長方形の墓壙(0.8m×1.8m)である。木棺痕跡は確認できなった。出土遺物として14点の管玉がある。その内12点は竪穴式住居跡25に破壊された墓壙の底部から出土している。また管玉は竪穴式住居跡25の埋土からも３点出土しており、当初はこの主体部に伴っていた可能性がある。

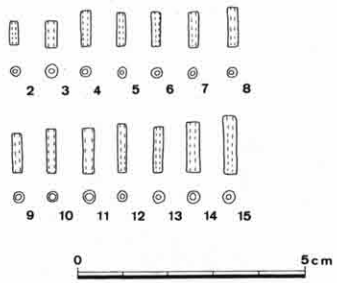
方形周溝墓の時期を考える資料としては、方形周溝墓１の南側と西側の溝の上層から第４様式に属する壺・甕・高杯・鉢・水差等の多量の土器が出土している。溝の埋没時期または方形周溝墓の下限を示すものと考えている。



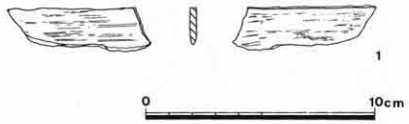
第４－１図



第４－２図

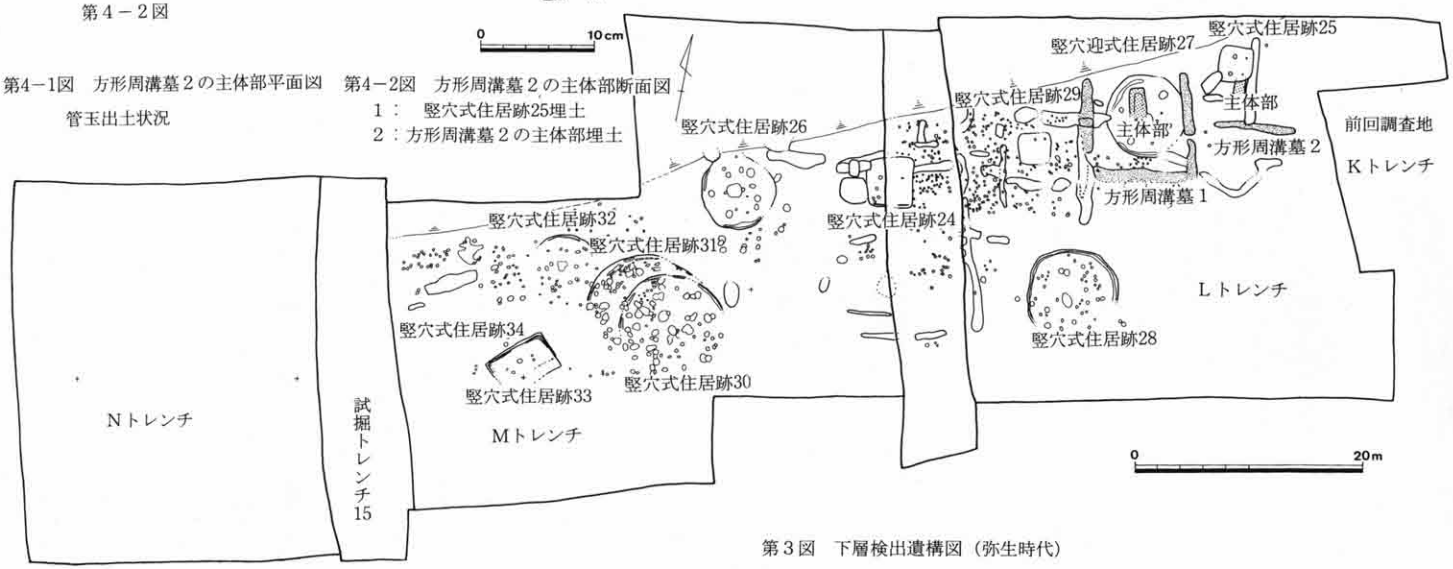


第５図　出土遺物（玉及び玉作関係遺物）
１：石鋸　Ｌトレンチ包含層
2～15：管玉　方形周溝墓２の主体部
16：方形周溝墓１の溝



第4－1図　方形周溝墓２の主体部平面図
管玉出土状況

第4－2図　方形周溝墓２の主体部断面図
１：　竪穴式住居跡25埋土
２：方形周溝墓２の主体部埋土



第３図　下層検出遺構図（弥生時代）

竪穴式住居跡の概要(規模・出土遺物)は付表1に示した。構造面については、平面プランの円形と隅丸方形・長方形に分けて考えた。

竪穴式住居跡(円形)はすべて周壁溝を持ち、さらに中央に炭や焼土を含む楕円形状の土坑「特殊ピット」を穿つ。また床面に炉跡などが確認できる住居跡もある。主柱穴の配置は規模により違いがあるが、4～10主柱が考えられる。また、主柱穴は40～60cmの深さをもつ。

竪穴式住居跡(隅丸方形・長方形)は形態・規模等さまざまであり、周壁溝をもつ例(24・33)、持たない例(25・29)がある。また2本の主柱配置をもつ住居跡(33・34)を確認した。

これら方形周溝墓群や竪穴式住居跡以外に、玉作りに関係する遺構がある。玉作り関係の遺物は碧玉の板状剥片・碧玉チップ・管玉未製品・石鋸・砥石・管玉などである。これらは、竪穴式住居跡の埋土や方形周溝墓の溝・ピット・弥生時代の包含層などから出土している。ただ、碧玉チップの出土はLトレンチ北西側の数個のピットに限定される。さらにこの地区はピットが比較的多く集中し、なんらかの遺構が存在した可能性がある。

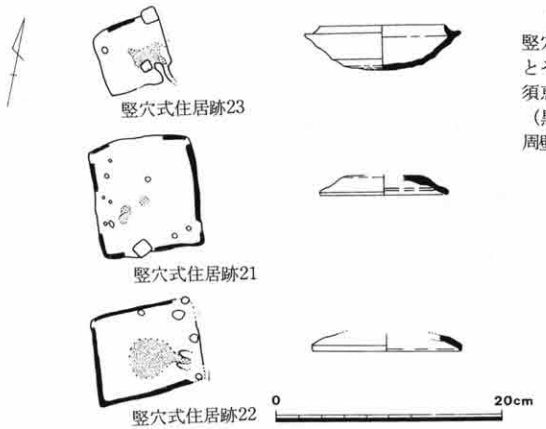
以上、弥生時代の遺構について略述した。弥生時代のベースとなる黄褐色粘土層は北から南にかけて緩やかな傾斜を示し、遺構の密度自体も南側ほど希薄になる。こういった点から考えると弥生時代の遺構はより北側(＝弥生時代における自然堤防の頂部もしくは丘陵縁辺部になると考えている)に広がっていた可能性がある。

②上層遺構面の調査(奈良時代)

竪穴式住居跡は計6基検出している。概要(規模・出土遺物)については、付表2に示してある。これらの中で比較的遺存状況の良好なものを出土遺物と合わせて提示した(第7図参照)。これら竪穴式住居跡には方形プランの住居跡(竪穴式住居跡21・22)と、「青野型住居跡」(注1)と言われる住居跡(竪穴式住居跡23)がある。また、住居内の施設については、3基の住居跡(竪穴式住居跡21・22・23)に周壁溝を検出し、住居内の東南部にカマドを敷設する例(竪穴式住居跡22・23)も確認した。しかし、すべての住居跡で、主柱穴を明らかにすることはできなかった。

また、一辺60～80cmの方形の柱掘形を多数検出した。これらは調査地全体に広がるが、掘立柱建物跡の規模・規格等を想定することは難しい。

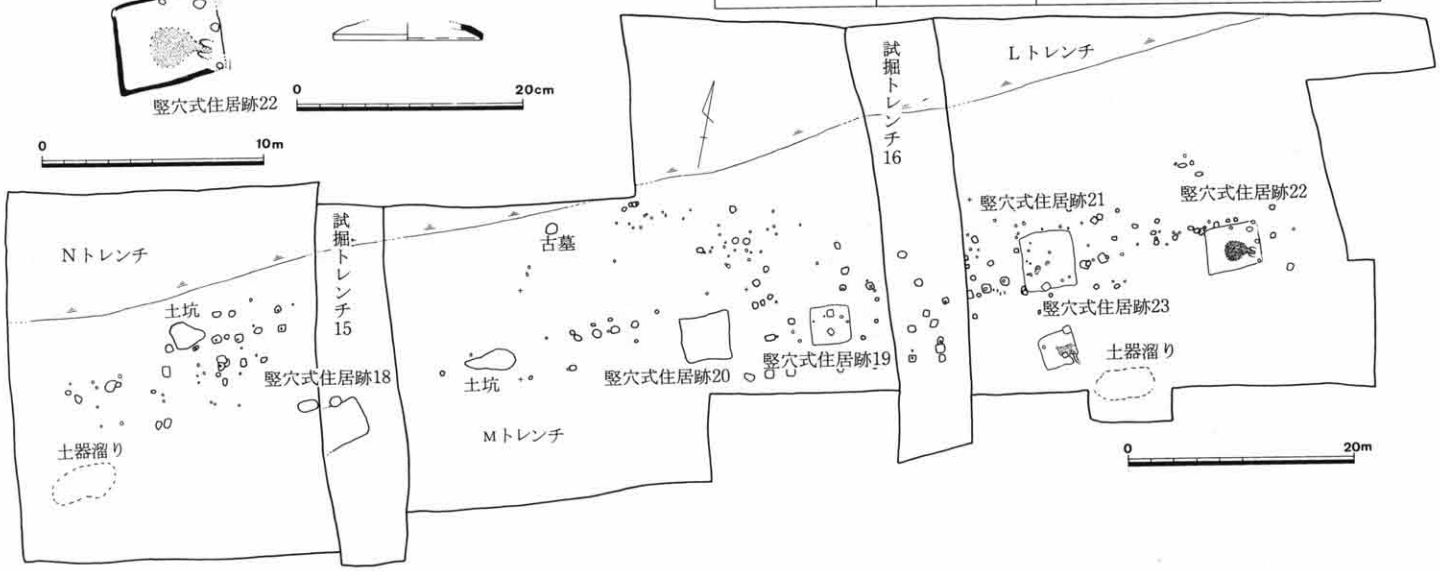
ほかに古墓を1基検出している。隅丸方形の墓壙(0.9m×1.0m)内に長方形の木棺痕跡(0.4m×0.6m)を検出した。木棺は側板の木片が若干残っていたが、底板はなかった。遺物には棺内底部から出土した数珠(15個)と古銭(10枚)がある。



第７図
竪穴式住居跡とそれに伴う須恵器
（黒い部分は周壁溝を示す）

上層竪穴式住居跡一覧表

遺　構　名	規模(東西×南北)	出　土　遺　物
竪穴式住居跡18	4.0×3.6m	土師器
竪穴式住居跡19	3.4×3.3m	
竪穴式住居跡20	4.2×4.0m	
竪穴式住居跡21	4.4×4.6m	須恵器・土師器・砥石
竪穴式住居跡22	3.8×3.8m	須恵器・土師器・砥石・敲石
竪穴式住居跡23	3.2×3.1m	須恵器・土師器



第６図　上層検出遺構図（奈良時代）

3．まとめ

今回検出の方形周溝墓１では主体部から管玉14点が出土した。また溝から出土した土器から方形周溝墓２の時期を中期後半を下限として考えることができる。ここで丹後・北丹波における碧玉製管玉の出土した墳墓を概観してみると、弥栄町坂野丘遺跡第２主体部（碧玉製管玉326点・ガラス小玉約500・ガラス製勾玉６）や丹後町大山墳墓群８号墓第２主体（碧玉製管玉３点・ガラス勾玉１点・ガラス小玉１点）・同周辺第９主体（碧玉製管玉４・ガラス小玉40）・同周辺第11主体（碧玉製管玉18・ガラス小玉176）・同周辺第14主体（碧玉製管玉６）・久田山遺跡３号墳第１主体（碧玉製管玉２点）等がある。これらはみな弥生時代後期中頃～後半の時期に集中しており、中期後半を下限とする墳墓は京都府北部でははじめてである。

さらに、畿内に目を転ずると、中期後半の方形周溝墓として田能遺跡第16号墓（碧玉製管玉632）等が知られている。ほかに山陰地方の長瀬高浜遺跡では、前期にさかのぼる墳墓から碧玉製管玉が出土している。類例として挙げたのは代表的な遺跡にすぎないが、北部九州をのぞけば、弥生時代中期以前で玉類が出土する墳墓はそれほど多くないであろう。

丹後・北丹波における弥生時代の墓制は、方形台状墓・方形周溝墓・方形貼り石墓等があり多様な様相を示す。ただ、装身具類が墳墓に埋納され始めるのは大山墳墓群以降であり、これを「装身具類における特定個人の私有の加速度的な進行と葬送儀礼の著しい発達の姿」としてとらえるむきもある。(注2) 今回検出した桑飼上遺跡の方形周溝墓２をどのように位置づけるかは今後の検討課題である。

以上、今回の調査成果で注目すべき点を記述した。ここで今後の問題点を列記する。

①弥生時代の竪穴式住居跡について、出土遺物の検討による詳細な時期決定と住居内の施設の構造を考える。

②弥生時代中期における集落域と墓域の時期的変遷を明らかにする。

（きしおか・たかひで＝当センター調査第２課調査第１係調査員）

注１　綾部市青野遺跡で多数検出されている。基本的に方形の竪穴式住居跡で４隅の内１つを掘り残し、内側へ突出させこの部分にカマドを設置する。

注２　平良泰久ほか『丹後大山墳墓群』（京都府丹後町文化財調査報告第１集　丹後町教育委員会）1983

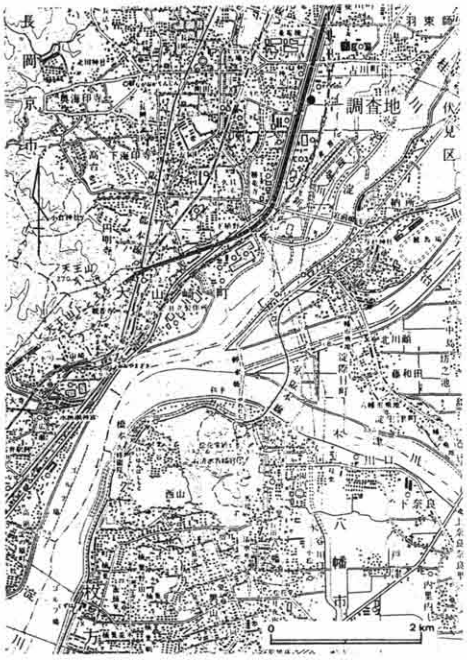
雲宮遺跡の環濠

戸　原　和　人

1．はじめに

雲宮遺跡は、京都府長岡京市神足寺田・雲宮を中心に所在する。地形的には、京都市の西南部で、桂川、宇治川、木津川の３河川が淀川となって大阪湾に注ぐ合流点の北東約３kmに立地する。３河川の合流地点は、南に男山、北には歴史に名高い天王山を南限とする西山の山並が連なり、京都盆地と摂津・北河内を画している。平野部は低位段丘と沖積地からなり、東南に向かって下がる地形を呈している。さらにこの東南には、かつて巨椋池が山城地方を南北に分断していた。

雲宮遺跡が世に知られるところとなったのは、昭和35年名神高速道路が建設される際、中山修一氏が弥生土器を採取され、横山浩一・田辺昭三氏によって発掘調査されたことによる。その後、佐原眞氏が畿内第Ⅰ様式を３段階に細分された際、この資料が使われ、「雲ノ宮遺跡」の名は学会で注目されるところとなった。(注1)



第１図　調査地位置図

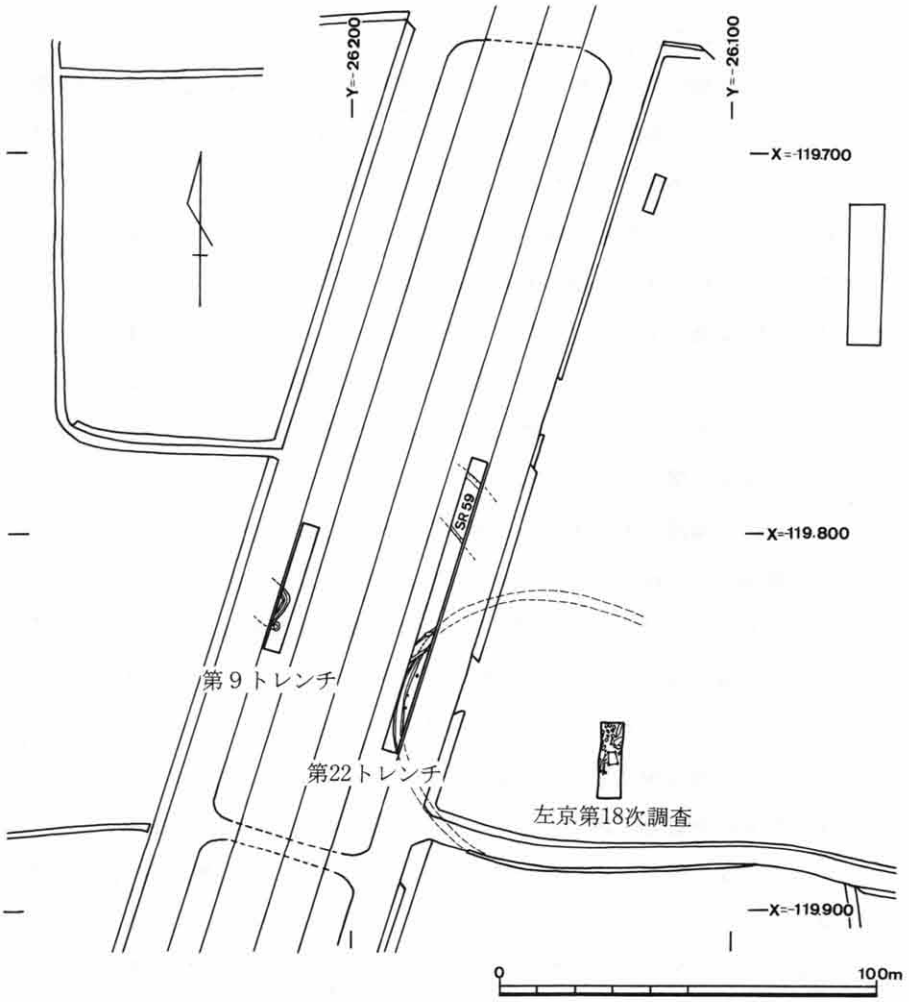
ここで概略報告するのは、名神高速道路の拡幅工事に伴い、平成元年度から平成２年度にかけて実施した調査のうち、弥生時代、とりわけ弥生時代前期を中心とする。(注2・3)

2．前期の遺構

同年の調査では、上層で長岡京期、中層で古墳時代、下層で弥生時代の遺構を確認している。下層で検出した弥生時代前期の遺構としては、溝(環濠を含む)や土坑・柱穴などがあり、従来不明であった雲宮遺跡の集落実態を解明するうえで貴重な資料を得ることができた。また、環濠内出土の土器は、一括性も高く、弥生前期の土器型式を考える上で重要なものである。以下、調

査の概要について述べておきたい。

溝ＳＤ48は、第９トレンチ内で検出した直角に曲がる溝である。二辺を検出したのみで遺構の構造を明らかにできないが、出土遺物から畿内第Ｉ様式のものと考えられる。トレンチ内での最大幅約2.5m、検出面からの深さ約0.3mを測る。溝は最大４層の土で埋まっており、溝内からは弥生土器の底部・甕の口縁部片・壺の胴部などが出土している。甕には、沈線が少なくとも３条みとめられる。壺の胴部には４本の沈線が巡り、上から２本目と３本目の沈線間には竹管文が認められる。胴部下半はヘラ磨きにより調整されている。この溝の各層から出土した土器には、時期差は認められない。遺構の性格としては、部分的な調査ではあるが、方形周溝墓の周溝である可能性を指摘できる。



第２図　弥生時代前期の遺構

土坑ＳＫ47は、溝ＳＤ48に取り付く畿内第Ⅰ様式の不定型土坑である。最大直径約2.3m、検出面からの深さ約0.28mを測る。土坑は２層の土で埋まっており、坑内からは第１様式の小型壺・甕蓋・石槍などが出土した。小型壺の頸部には、削り出しによる凸帯が見られ肩部には2本の沈線が巡る。外面はヘラ磨きで調整し、黒斑をとどめる。石槍はサヌカイト製で、断面が菱形を呈する細身の製品である。本資料は中央部で折れて先端部が土坑内から、下半部が上層の包含層から出土した。

内環濠ＳＸ60は、第22トレンチで検出した。検出した環濠は、西側の肩が削平されていたが、復原幅約3.0m・深さ約1.0mを測り、約30mにわたって確認している。調査地内で検出した範囲では、東にむかって弧を描き、住居はさらに東に営まれていたと想定される。濠は５層の土で埋まっており、これを断面で見ると、その形から上から２層分の土で埋まった部分は、一度掘りなおされたものと考えられる。

濠内から出土した遺物は現在整理中であるため詳細は明らかでないが、おおむね畿内第Ⅰ様式の中段階に属する各種の土器とともに石鏃・石庖丁・土製紡錘車などがあり、第１・２層では集落の内側から多量の土器が投げ込まれている。出土した土器のうち、壺の表面に赤色の顔料を塗ったのち、黒色の顔料で木葉文を描いた彩文土器は特に注目される。また、木製品としては高杯の杯部・鍬の未製品なども出土している。

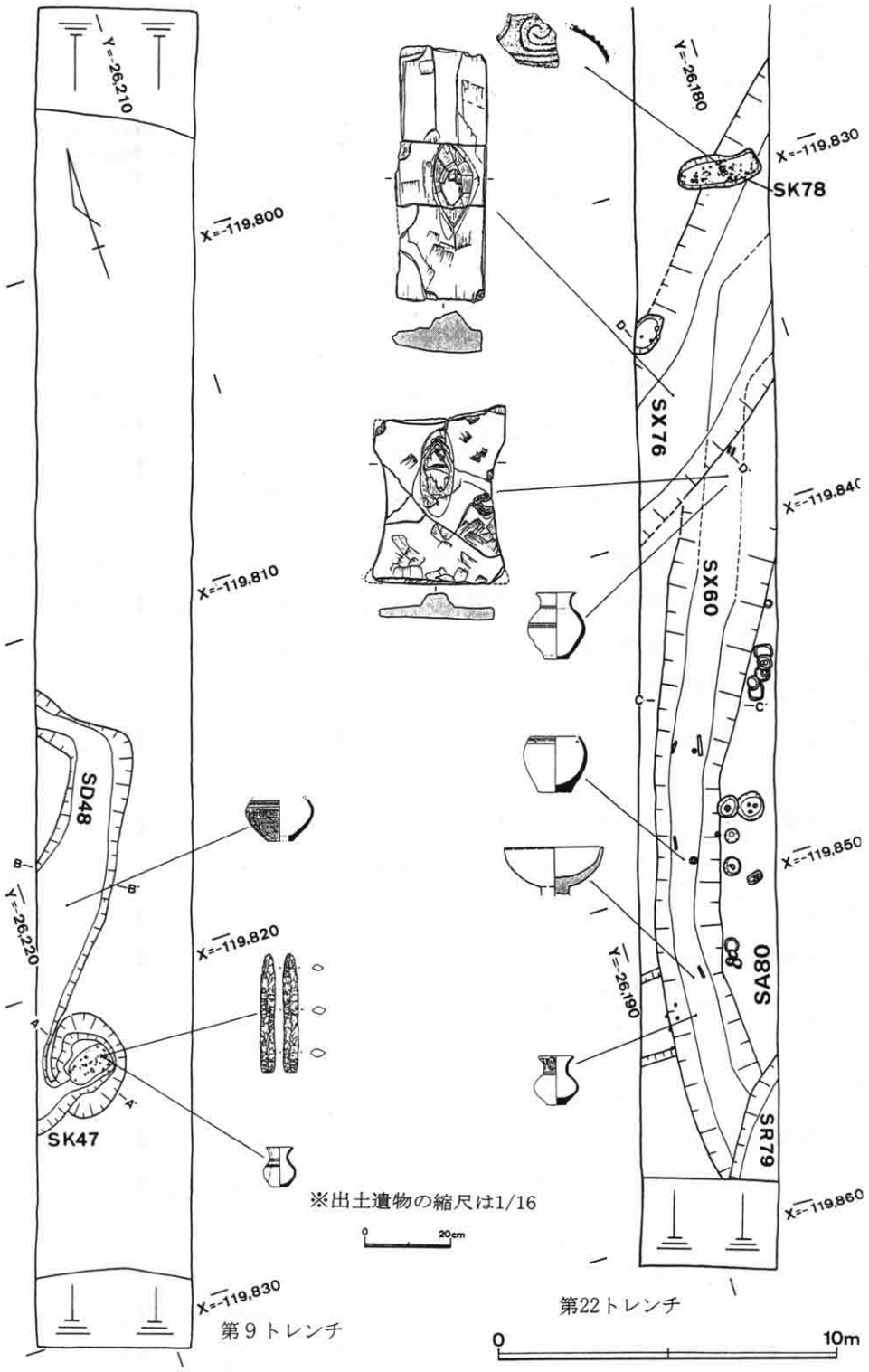
柵列ＳＡ80は、内環濠の東肩部(内側)で、濠の肩部にそって直径30cm程度の掘形をもつピット(柱穴)を13基検出している。ピットは、一定の間隔をおき複数確認しており、柱の建て替えが行われたと考えられる。また、これらの柱の配列から、環濠の内側に柵列のような施設を設けた集落の構造を想定することができる。

外環濠ＳＸ76は、内環濠ＳＸ60との切りあい関係や、それぞれの遺構から出土する土器の様相により内環濠が一度埋まった段階で新たに掘られた環濠と考えられる。

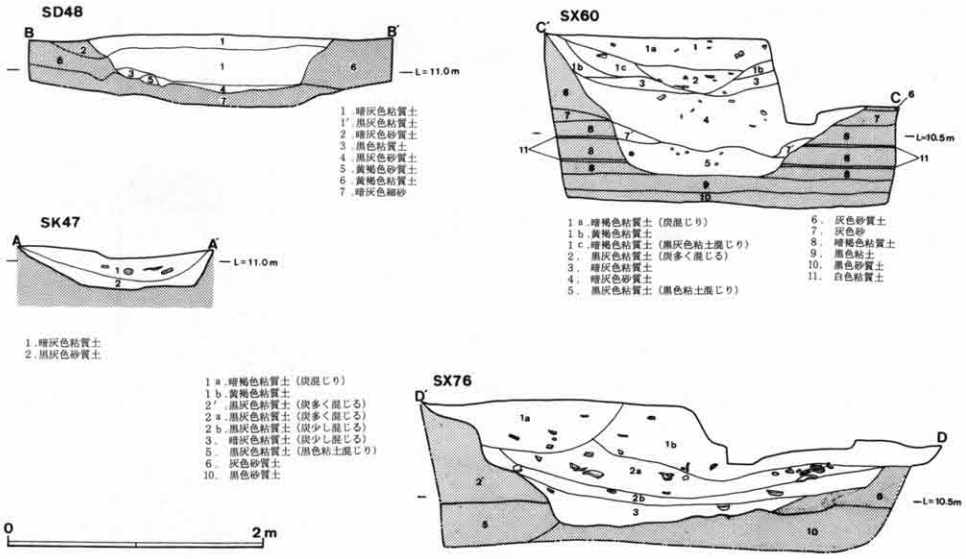
検出した環濠の規模は、幅約5.0m・深さ約1.0mを測る大規模なもので、約12mを検出した。濠が埋まった最終段階の埋土(第１層)は、２回掘りなおしをしており、幾度かにわたる溝さらいが行われたことをものがたっている。

濠内から出土した遺物は現在整理中であるため詳細は明らかでないが、おおむね第１層からは畿内第Ⅰ様式の新段階に属する各種の土器が多く出土しており、中でも、瀬戸内東部地方で作られた土器の特徴をもつ壺や甕は注目される。第１・２層では、集落の外側と考えられる北西から多量の土器が投げ込まれている。濠の最下層からは、木製の鍬の未製品・加工品、獣(猪の下顎)の骨などが出土している。下顎には、基部に円形の穿孔が施されており、祭祀儀礼に用いられたものと考えられる。

土坑ＳＸ78は、外環濠ＳＸ76の西肩(外側)で検出した長径2.5m・短径1.0m・深さ0.2



第３図　検出遺構及び出土遺物



第４図　検出遺構断面図

mの長楕円形をした土器溜りである。この土坑は、外環濠の西肩が埋まった段階で掘られており、今回検出した弥生時代前期の遺構のなかでもっとも新しい遺構と考えられる。土坑内からは、畿内第Ｉ様式の新段階に属する壺・甕などが出土しており、なかでも壺の肩部に粘土紐で巴に文様を張りつけた土器は、「丁柳瀬遺跡」出土土器などに見られるように、播磨地方との土器交流を考える上で重要な資料であり、従来雲宮遺跡で確認されていなかった資料である。

沼状遺構ＳＲ59は、トレンチ北寄りで検出した青灰色の粘質土によって埋まる幅約15m・深さ1.0m以上の規模を持った地形の落ち込みである。堆積層は、２層に分類でき、上層が黄褐色系の粘質土で下層が明るい青灰色の粘土層になる。青灰色粘土層上面及び青灰色粘土層中より弥生時代前期の土器が出土したが、水田耕作に伴う畦畔などの遺構は検出できず、最下層では炭化した木片が出土したのみである。

３．まとめ

雲宮遺跡は、土器の編年研究によりその名は知られるところであるが、集落としての実態は未知のままであった。今回の調査では、今まで不明であった集落構造の一部をようやく確認することができた。

今回確認した遺構を整理すると、環濠の西側（外側）で検出した「Ｌ」字の溝や土坑が方形周溝墓等の埋葬に係わる施設の可能性があり、その東に集落を取り囲む環濠が設けられていることが想定される。環濠は当初、内側の濠のみが開削されており、その内側には柵列が設けられている。外側の環濠の最下層では、内環濠の延長と考えられる落ち込みを検

出したことから、外環濠は、内環濠がいったん埋まったのち、新たに設けられたと考えられる。内環濠が掘りなおされた段階では、両環濠は並行しており、二つの環濠が集落を囲む時期があったと考えられる。検出した環濠を地形図に入れ、周辺の地形を検討すると、調査地の南側から東にのびる水路と道路が、環濠の延長線上にのって緩やかな円弧を描き、東にむかってのびていることがよみとれる。

この円弧内の集落内と考えられる部分では、過去２度の調査が行われており、前期の土坑や掘立柱建物跡と考えられる遺構が検出されている。(注4・5) また、この地点の地形は、周囲よりも一段高かったらしく、周辺の調査では、本調査地の北寄りで古墳時代中期の須恵器を含む溝や、旧河道、古墳時代前期の竪穴式住居跡１棟のほか、布留式土器を含む溝や、旧河道などを検出し、北西寄りでは弥生時代中期から後期の竪穴式住居跡１棟のほか、土坑群を検出している。このように本調査地の周辺では各時代の遺構が少しずつ位置をずらしながら営まれていることが明らかになっており、さらに北及び南では遺構面が非常に深くなるためか、顕著な遺構の検出を見ていない。(注6) また、北200mでは弥生時代前期の遺物を包含する川状の落ち込みが確認されている。(注7) このように、周辺で各時代の遺跡が営まれているのは、この地が遺跡の営まれた各時期に微高地であったためと考えられ、地理的条件が大変よかったことを示している。

今後、濠内から出土した土器の整理をまたなければ、確かなことは言えないが、内環濠が埋まった段階でも、外環濠は何回か掘りなおされており、わずかな溝として使用されていたものと考えられる。しかし、弥生時代の中期にかけては包含層中からわずかに土器が出土するものの、遺構は確認されていない。この段階にはこの村は放棄されたようである。

周辺では、この集落の北西寄り約100mで、弥生時代中期後半から後期にかけての住居跡などが確認されたが、現在までに確認されている雲宮遺跡に続く拠点的集落としては、西約600mの台地上に展開する神足遺跡が知られている。

以前から全国的に知られていた雲宮遺跡の弥生時代前期の環濠をはじめて検出すると同時に、環濠内からとは言え、多量の土器が層位的に出土したことは、今後の弥生土器の編年研究、さらに弥生時代の集落研究のための貴重な資料になると考えられる。今後、遺物の整理をすすめたのち詳しく報告したいと考える。

（とはら・かずと＝当センター調査第２課調査第３係主任調査員）

注１　佐原眞「山城における弥生文化の成立－畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置－」（『史林』50-5　史学研究会）　1967

注２　戸原和人・竹井治雄・三好博喜・中川和哉・広瀬時習「長岡京跡左京第216・右京第343次発

掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第40冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1991

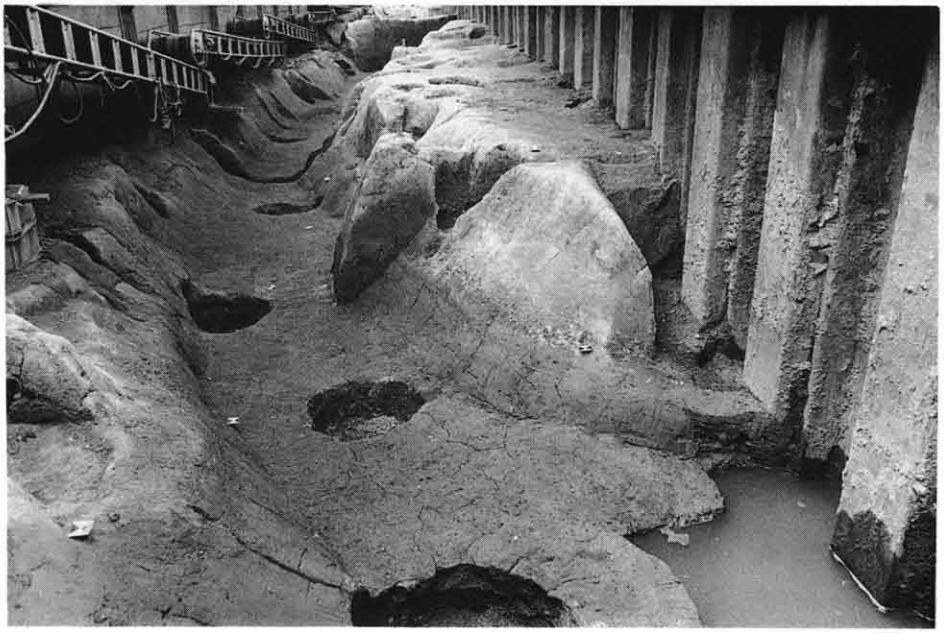
注３　「長岡京市　雲宮遺跡－長岡京跡左京第216次下層、中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う発掘調査－」京埋セ中間報告資料№.90-09　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1990

注４　戸原和人「長岡京跡左京第18次(7ＡＮＭＴＤ地区)調査概要－左京六条二坊七町・雲宮遺跡－」(『長岡京市文化財調査報告書』第14冊　長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所)　1985

注５　長岡京跡左京第229次(7ＡＮＭＴＤ－2地区)調査　(財)長岡京市埋蔵文化財センター　1990
左京第18次調査の東で行われた調査では、弥生時代前期の土坑が検出されている。(財)長岡京市埋蔵文化財センター中島皆夫氏の御教示による。

注６　注２による。

注７　白川成明「左京第212次(7ＡＮＭＹＢ地区)調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報昭和63年度』　(財)長岡京市埋蔵文化財センター)　1990



内環濠検出状況

南山城地域の後期古墳の一様相

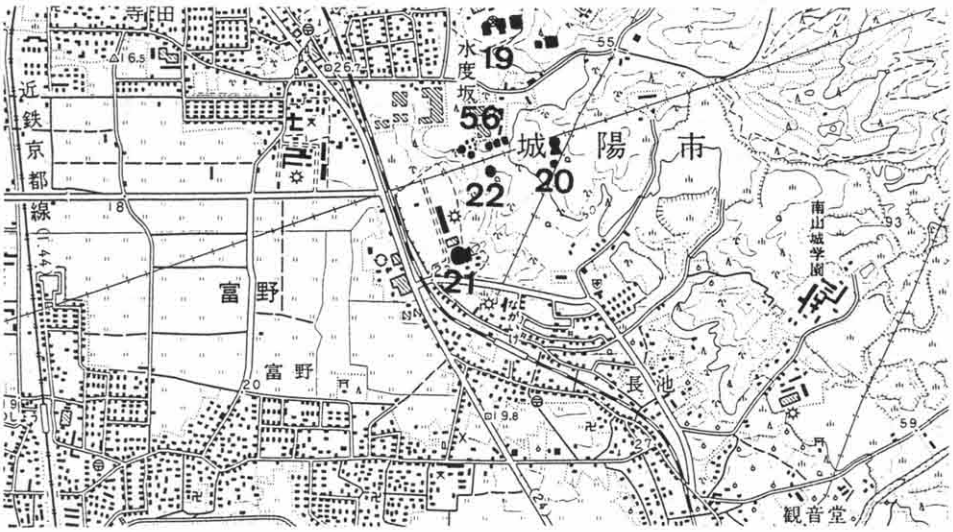
－城陽市・長池古墳を中心として－

小　池　　寛

1．はじめに

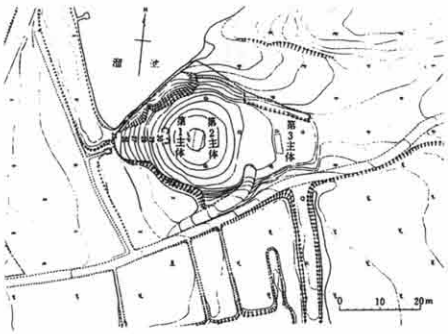
長池古墳が所在する京都府城陽市は、南山城の中にあって最も古墳が集中する地域であり、古墳時代の墳墓研究についての基礎資料を数多く提供しているばかりでなく、それらについての研究論考も多く提出されているところでもある。しかし、その研究対象は、主に古墳時代前期に成立する梅の子塚古墳群・西山塚古墳群・尼塚古墳群・上大谷古墳群や中期に築造が開始される下大谷古墳群・平川古墳群・宮ノ平古墳群・芝ヶ原古墳群などの前・中期古墳に限定されていると言っても過言ではない。特に、四獣形鏡・銅釧などとともに庄内式併行期の壺が出土した芝ケ原古墳と中期の大型前方後円墳である久津川車塚古墳は、畿内をも含めた広範囲での解釈が行われており、当該地を代表する墳墓として広く知られている。これら前・中期古墳に比べて、後期古墳の研究は、古墳の絶対数が減少することと副葬品の簡略化もあって、あまり進展が見られないのが現状である。

このような状況の中で長池古墳・冑山古墳群は、当該地の後期古墳の様相を理解する上で重要な調査事例であり、芝山古墳群(注1)などの発見とともに、ようやく後期古墳を狭小な地



第１図　長池古墳位置図(1/25,000)

21.長池古墳　19.宮ノ平古墳群　20.梅の子塚古墳群　22.めのこ塚古墳　56.芝山古墳群



第２図　長池古墳地形図(注２より転載)

域ではあるが、一つのまとまりとして把握する段階に至ったと言える。

本文は、長池古墳出土の遺物について報告し、新たに判明した事実と若干の問題提起を行うことを目的とし、周辺に点在する後期古墳の様相についても概観したい。

２．長池古墳の沿革

長池古墳は、京都府城陽市富野荘上ノ芝(第１図)に所在した古墳で、宅地開発に伴い1965年に発掘調査が行われた。その調査成果は、「長池古墳発掘調査概要」(注２)として報告されている。それによると、古墳の名称は、本古墳の北方300mに所在した「めのこ塚」と混同されることが多いため、調査に際し「長池古墳」と命名したとある。発掘調査は、城南高校教諭山田良三氏が宅地造成によって削平される寸前に文化財保護課にその旨を通報し、京都府教育庁文化財保護課堤圭三郎氏、天理大学西谷眞治氏、天理参考館近江昌司氏・白木原和美氏によって行われた。以下、古墳について概観しておきたい。

(1) **墳丘**(第２図)　長池古墳は、東北から西南にのびる丘陵端(標高31.6m)に位置し、西側の円丘部と東側の低平な方丘部からなる前方後円墳形を呈している。古墳の規模は、全長50m・後円部径32m・同墳高6.5m・前方部先端の幅14m・墳頂と前方部先端の比高は３mであり、周濠・埴輪・葺石は確認されていない。墳形については、前方部の形状が短く先細りであるため、調査当時から前方後円墳と断定するには多くの論議があったと聞くが、第３主体が方丘部中央に存在することから、墳形を前方後円墳と規定することについては首肯してよい状況にある。しかし、前方部北側は、耕作によって築造時の形状を保っておらず、南側も農道によって旧状が大きく改変されていることから、従来の見解である「前方部先細りの前方後円墳」(注３)と考えることは困難である。

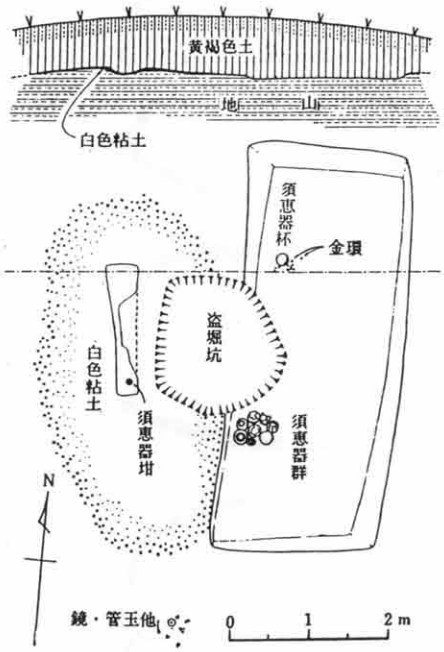
(2) **埋葬主体部**　埋葬主体部は、後円部に２基・前方部に１基確認されている。

第１主体(第３図)　後円部の西端に位置し、全長1.5m・幅0.28～0.35m・深さ0.1mの規模である。粘土床の上面には酸化鉄朱が厚く塗布され、須恵器の坩(第７図51)が南端で出土している。主体部の周囲は白色粘土を薄く敷いて整地している。

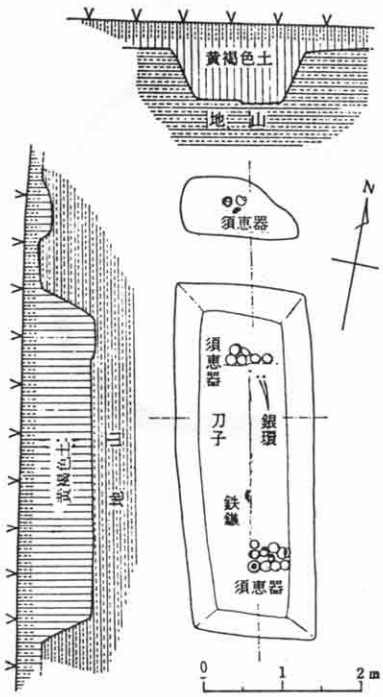
第２主体(第３図)　全長5m・幅2.1mの長方形を呈しており、北側で須恵器の杯蓋２点、琥珀製棗玉16点以上、瑪瑙製小玉１点、銀製空玉１点、金環１対、南側で須恵器の甕１点・坩２点・蓋杯５対10点が出土している。

第３主体(第４図)　前方部に位置し、全長4.5m・幅1.6m・深さ0.8mの規模であり、主軸線はほぼ磁北と一致する。北側から須恵器の杯蓋５点・杯身２点、銀環３点、刀子１点、鉄鏃８点が出土し、南側から須恵器の広口壺１点・坩２点・蓋杯３対６点・杯身３点・台付壺１点、土師器の壺１点が出土している。主体部の北側には、須恵器の蓋杯２対４点を埋納した土壙が掘り込まれている。なお、明確な掘形をもたないが、第１主体の南方では、小型銅鏡１、碧玉製管玉１以上、土師器の高杯・壺などが出土している。(注4)

各主体部の新旧関係は、第１主体周辺に広がる白色粘土を第２主体が切っている点と第３主体出土土器群が第２主体出土土器群より新しい要素を持っている点から、第１主体一第２主体一第３主体の順序で掘り込まれたと判断できる。



第３図　第1・2主体実測図(注２より転載)

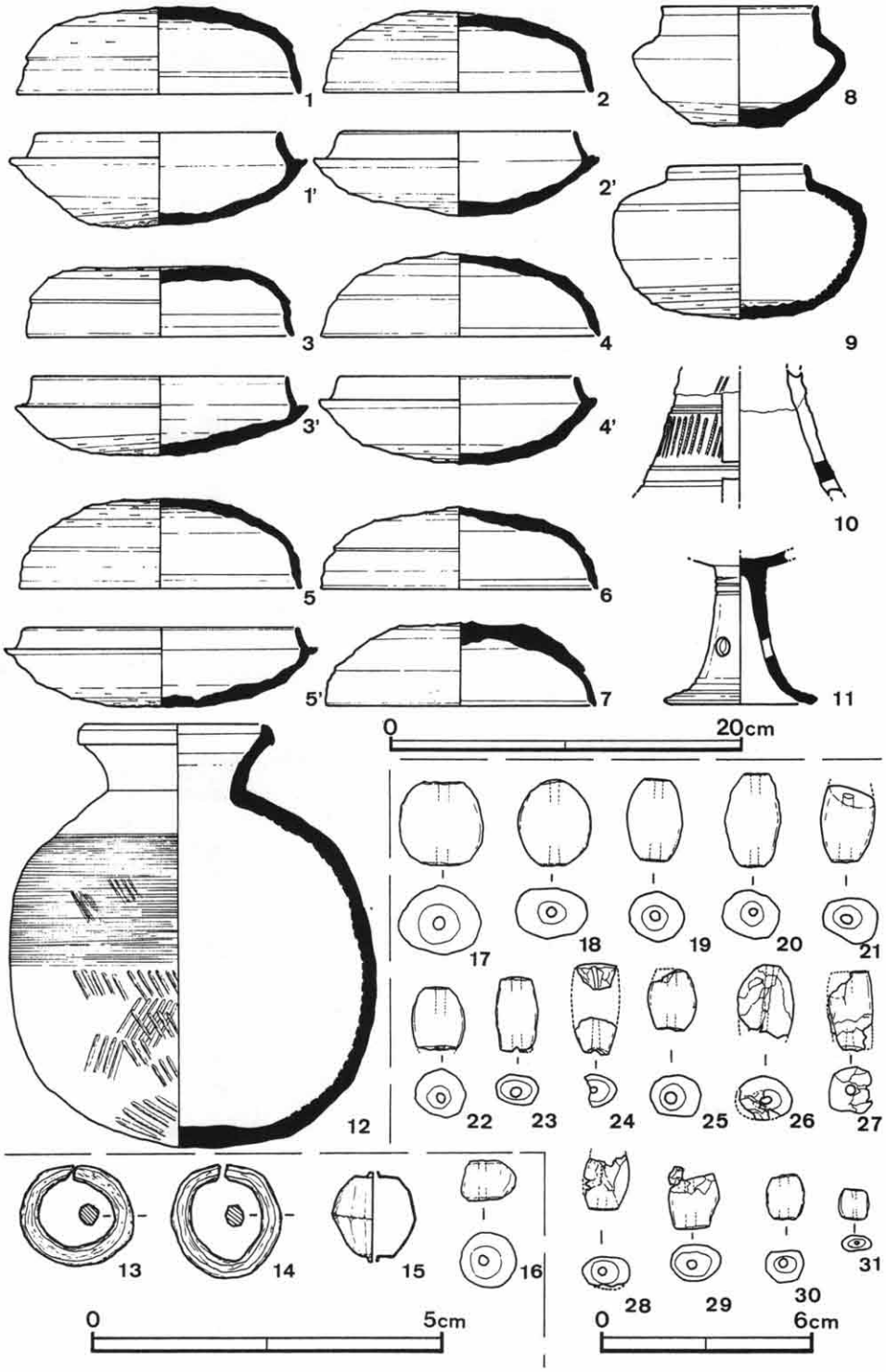


第４図　第３主体実測図(注２より転載)

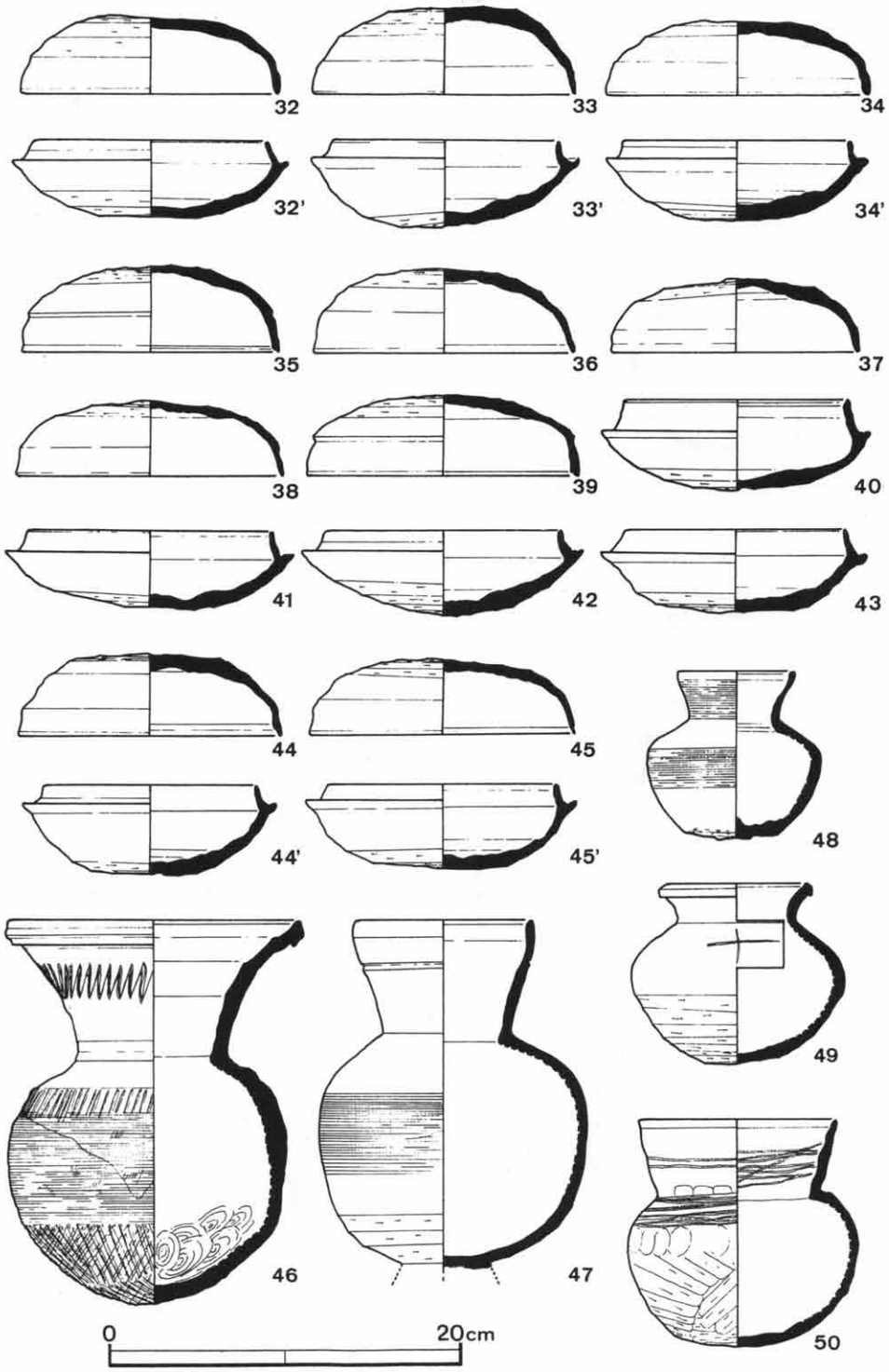
３．出土遺物

(1)第１主体出土遺物(第７図)　遺物は、須恵器の壺が一点出土したにすぎない。51は、直立する口縁部をもち、底部は不整方向の箆削りで成形している。

(2)第２主体出土遺物(第５図)　須恵器の杯蓋は、天井部が比較的平らで、天井部と口縁部をわける稜がわずかに突出する1・2・3の群と、天井部が丸く稜が沈線化する4・5・6の群に分類できる。基本的に口縁端部は丸いが、5・6のようにわずかに内傾するものがある。須恵器の杯身は、立ち上がりが比較的長い1'・2'・3'の群と立ち上がりがそれらに比べて短い

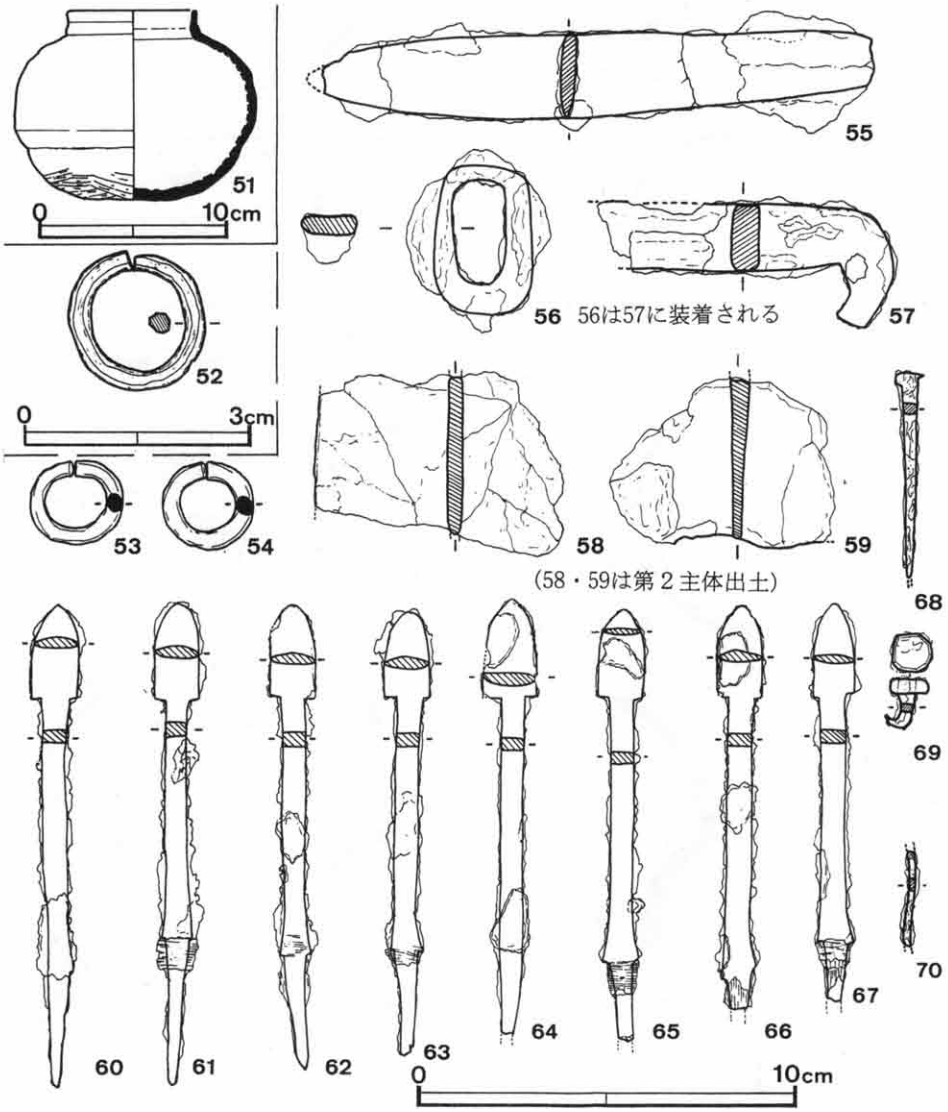


第５図　第２主体出土遺物実測図(同一付番はセット)
北側：6・7・13～31　　南側：1～5・8・9　　盗掘坑：10・11



第６図　第３主体出土遺物実測図（同一付番はセット）
北側：35～40　　南側：32～34・41～43・46～50　　土壙：44・45

4'・5'の群に分類できる。須恵器の器台(10)は、方形透孔と刺櫛文帯が残存する脚部である。耳環(13・14)は、２㎜前後の純金製の棒を円形に曲げたもので、断面は八角形である。銀製空玉(15)は、糸を通すために上端・下端に小円孔を穿ち、側面形は六角形で細かい面取り細工を施す。瑪瑙製小玉(16)の側面形は不整形で、断面は正円である。琥珀製棗玉は、既概報では大きさから３種類に分類しているが、長さが2.4cm前後・2.1cm前後・1.3cm前後・0.9cmの４種類に分類するのが妥当である。材質は不良であり黒紫色を呈している。なお、



第７図　第１主体・第３主体出土遺物実測図
第１主体：51　　第３主体：52～57・60～70

琥珀によく見られる灰色の縞模様が観察できる。

(3)第３主体出土遺物(第６・７図)　須恵器の杯蓋は、天井部と口縁部をわける稜がわずかに残存し、内傾する口縁部をもつ35・39の群と、稜がなく、口縁端部が丸い一群に分類できる。須恵器の杯身は、立ち上がりが比較的長く、内傾する口縁部をもつ40と短く立ち上がる一群に分類できる。形態的特徴から杯蓋(39)と杯身(40)は、同時期にセットで搬入された可能性が高い。須恵器の壺(47)は、口縁部が内湾する台付長頸壺で、脚部を副葬段階で故意に欠損させた可能性がある。土師器の壺(50)は、肩部以下を篦削り、上位を篦磨きでていねいに調整している。銀製環(52)は断面が八角形である。金銅製耳環(53・54)は、断面が円形を呈している。刀子(55)は残存長14.7cm・最大幅2.3cm・厚さ0.5cmで先端が欠損している。不明鉄製品(56)が57の鉄器に装着された状態で出土している。鉄鏃(60～67)はすべて尖根式で、矢柄の痕跡を残しているものが多く、残存状態は良好である。鉄釘(68)は残存長が5.2cmである。鉄製鋲(69)は、全長が1.3cmで、先端が屈曲し、頭部は不整八角形の面をもつ。

４．出土遺物の所見と類例

(1)須恵器の型式　第２主体出土の蓋杯は、天井部と口縁部をわける稜はほとんど失われ、口縁端部は丸く、杯蓋の口径が15～16cm、杯身の口径が13～14cmと最も大型化する段階の特徴を持っており、陶邑編年(注5)ＴＫ10前後に比定できる。一方、第３主体出土の大半の蓋杯は、天井部と口縁部をわける稜はなく、杯身の立ち上がりも短く、杯蓋の口径が14～15cm、杯身の口径が12～13cmと小型化している点からＴＫ43前後に比定できる。なお、杯蓋(39)は、天井部と口縁部をわける稜がわずかに残り、内傾する口縁端部を持っており、杯身(40)は、比較的長い立ち上がりをもち、内傾する口縁端部であることから、ＭＴ15前後に比定できる資料である。

(2)琥珀製棗玉　第２主体から出土した琥珀製棗玉は、詳細に分類すれば４種類に分けられる。京都府内の琥珀製品出土例は、福知山市ヌクモ２号墳から勾玉が１点、京北町愛宕山古墳で小玉が数点、長岡京市長法寺七ツ塚古墳群の３号墳埋葬施設４から棗玉１点、向日市物集女車塚古墳から棗玉４点などがある。古墳時代全般を通して琥珀製玉類が副葬される時期は、ＭＴ15前後を境にして増加する傾向があり(注6)、同時期の類例を新たに追加できた。なお、琥珀の産出地には、岩手県久慈市周辺と千葉県銚子市周辺の２か所が知られている。長池古墳の琥珀製棗玉は、室賀照子氏(注7)が赤外吸収スペクトル法によって産地同定を行い、岩手県久慈市周辺の琥珀であることが判明している。

(3)耳環・空玉・鋲　第２主体から出土した純金製耳環と第３主体の銀製環は、ともに断

面形態が八角形である。一般的によく見られる耳環は金銅環であるが、金・銀の細環を曲げ、断面形態が八角形に細工された耳環は比較的少ない資料である。なお、第３主体において単体で出土した銀製環は、出土地点と形状から勘案して指輪である可能性が高い。

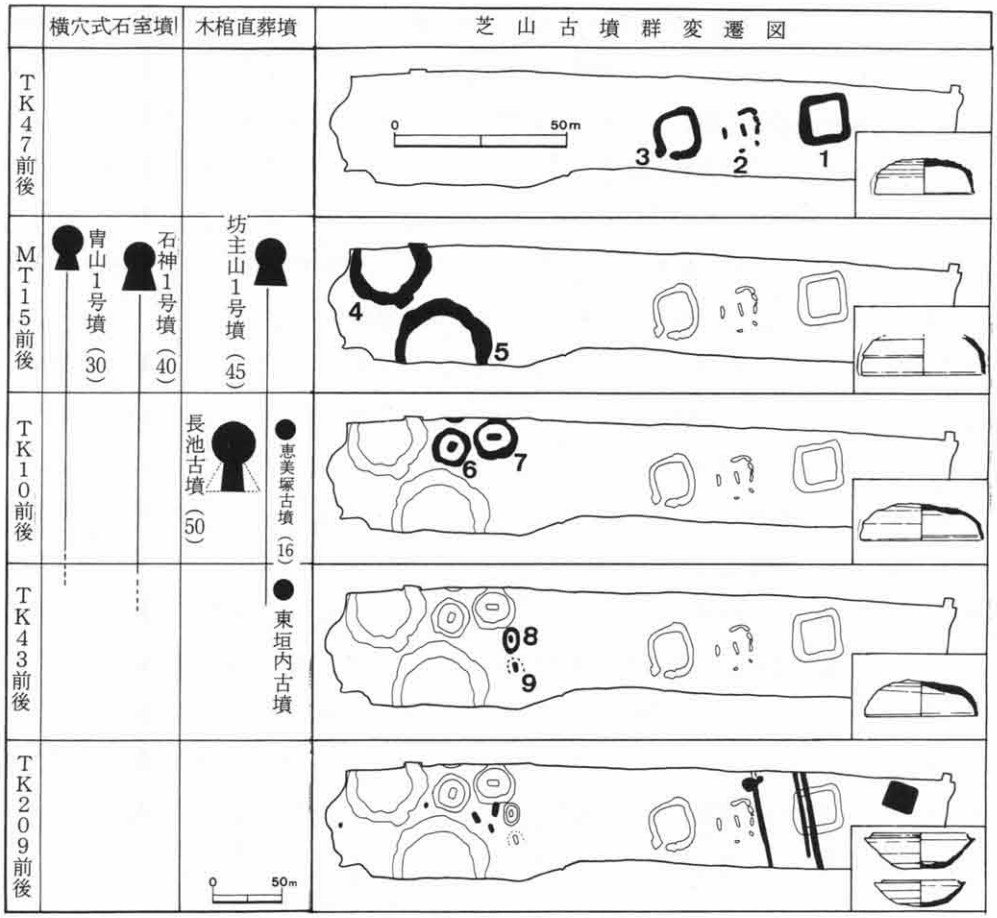
銀製空玉の類例として、向日市物集女車塚古墳(注8)から出土した18個体などがある。車塚古墳の銀製空玉は、半球体を重ね合わせた接合部に明瞭な稜線があるが、本資料は接合痕をていねいに加工し、球体に面取を加える。当時の加工技術の水準を知る上で重要である。

鋲の類例は、丹後町高山３号墳(注9)に十数個体ある。そのいずれもが先端部を屈曲させており、革製品などのような軟質材に打ち付けた後、内側から折り込んだと考えられる。

５．長池古墳の解釈をめぐって（第８図）

長池古墳が所在する城陽市には、現在800余基の古墳が確認されている。その中にあって中期中葉に築造された久津川車塚古墳は、全長180mの規模を有する大型の前方後円墳であり、畿内政権と政治的関係を強固にし、在地支配を行った大首長の存在を示唆している。車塚古墳より後出して築造された芭蕉塚古墳は、久津川車塚古墳の被葬者と密接な関係を維持した有力者の墳墓であるが、それ以後、両古墳のように突出した規模を持つ前方後円墳の築造は見られなくなる。このような現象は全国的に見られることから、大型の前方後円墳を頂点とした各地域の支配体制が、内在的要因によって徐々に崩壊したことを物語っている。それ以後は、規模が極端に小型化するものの、中期後半までは丸塚古墳・梶塚古墳・青塚古墳・宮ノ平古墳群などが築造される。なお、南山城地域における中期の大型前方後円墳は、久津川車塚古墳・芭蕉塚古墳を除いて他に見られないことから、久津川車塚古墳に葬られた有力者が、畿内政権との関係をより強固にし、南山城地域全域を掌握していたと解釈できる。

古墳時代後期に入ると久世地域では小型の前方後円墳である赤塚古墳・坊主山１号墳・長池古墳、長谷川・青谷川地域では冑山１号墳・石神１号墳・青谷丸山１号墳などが築造される。特に、上大谷古墳群以北と冑山古墳以南には横穴式石室が採用されるが、その中間に挟まれた久世地域の古墳は木棺直葬墳であり、換言すれば、「横穴式石室不採用(注10)」の地域と言える。その要因は、それらの古墳を築造した集団の階層的位置付けと深く関連するものであろう。かつて芝山遺跡や宮の平古墳群などで確認された「低墳丘方形墓(注11)」の被葬者像を、直接的に大首長に支配されない階層の墓制であったことを指摘したが、石室を採用しない古墳が、前期に築造された梅の子塚古墳群や尼塚古墳群とほぼ同一丘陵内に築造されるという現象は、和田氏が指摘するように(注12)、在地勢力の復活を意味するものと考えられる。また、位置的に見れば長池古墳は横穴式石室不採用の地域の南限となり、南方に所



第８図　主要古墳及び芝山古墳群変遷図

在する横穴式石室墳である青山古墳群・石神古墳群・青谷丸山古墳群などの存在は「新しい階層の台頭」を示すものと解釈できる。

以上のような歴史的環境の中で、長池古墳が所在する小地域での位置付けについて、比較的まとまった状態で小規模古墳群を検出した芝山古墳群と、長谷川・青谷川地域に所在する青山古墳群などを含めて、各古墳の推移を中心に検討を加えたい。

芝山古墳群は、陶邑編年ＴＫ47段階の３基からなる低墳丘方形墓によって造墓行為が開始される。この低墳丘方形墓は、弥生時代に盛行する方形周溝墓の系譜を引く伝統的な墓制であることから、先述したように直接的に大首長に支配されない階層の墳墓形態であったと考えられる。次のＭＴ15段階になると、先述した低墳丘方形墓よりは築造範囲を丘陵の先端に移動して、直径18m前後の円墳群が築造される。伝統的な低墳丘方形墓から円墳へと移行する現象は、地域首長を頂点とする支配体制内へ低墳丘方形墓を築造した集団が、徐々に組み込まれていたことを示唆している。ＴＫ10段階では規模の小型化が一層進み、

直径８ｍ前後の低墳丘円形墓群が築造され、ＴＫ43段階では更に、長軸５ｍ前後の小円墳（楕円形墳）群へと推移する。ＴＫ209段階に至っては、無墳丘の土壙墓群が掘られ、造墓行為は終焉を向かえるのである。これらの変遷過程を基本に各古墳を解釈しておきたい。

芝山古墳群に低墳丘方形墓が築造されるＴＫ47前後には、周辺に古墳の築造が見られない。これは少なくとも、この時期まで中期に成立する大前方後円墳の支配形態が、維持されたことを示唆している。ＭＴ15段階では、芝山古墳群が低墳丘方形墓から円墳へと移行する時期であり、長谷川・青谷川地域には、横穴式石室墳である冑山１号墳・石神１号墳などが築造される。これらの横穴式石室墳の出現は、先述したように新しい階層の台頭と解釈されているが、その段階にあっても伝統的な木棺直葬墳を採用する坊主山１号墳の存在は、この地域が群集墳成立時においても、ある種の在地性を堅持していることを示しており、横穴式石室を導入した地域とは、政治的な状況が異なっていたと解釈することも可能である。ＴＫ10段階には、ＭＴ15段階に成立した横穴式石室を埋葬主体とする前方後円墳は、後期古墳に通有に見られる群集墳へと変化するが、木棺直葬墳の前方後円墳としては長池古墳が築造される。家族墓である群集墳が成立し、卓越した古墳を築造しなくなったＴＫ10段階においても、前方後円墳である長池古墳が築造される事実は、旧勢力の復活をも意味するのである。しかし、当該地域においては、芝山４・５号墳から低墳丘円形墓である６・７号墳へと規模の縮小が見られることは、長池古墳を頂点とする在地勢力に何らかの変化があったと考えるべきである。

６．まとめ

1965年に発掘調査された長池古墳は、墳丘測量図から全長50ｍの前方後円墳として、当該地域の後期古墳を考察する際にたびたび登場してきた。今回の遺物整理によって築造時期は、陶邑編年ＴＫ10前後に比定でき、墳丘内への埋葬行為は、ＴＫ43にまで及ぶことが判明した。出土遺物は、須恵器のほか琥珀製棗玉・断面八角形の純金製金環・銀製指輪・銀製空玉・鉄鏃など多様であり、後期古墳の副葬品研究に新たな類例を追加できた。

長池古墳は、本文でも指摘したように木棺直葬墳であり、それ以南の長谷川・青谷川周辺には横穴式石室墳が点在している。本古墳は、同一丘陵内に所在する芝山古墳群と同じ系譜上にあり、旧勢力（在地勢力）の再編成の結果、出現したと考えられる。一方、横穴式石室の出現は、和田氏の指摘する「新しい階層の台頭」を意味するものと解釈でき、その両者が併存する現象は、当地の古墳時代後期における政治的情勢の一端を表しているものと解釈できよう。

本報告に掲載した出土遺物実測図は、1987年当時、天理参考館の所蔵であった際に実測

したもので、実測図作成にあたり近江昌司氏・日野宏氏の御協力を得た。また、1990年に京都府立山城郷土資料館に移管された際、遺物写真撮影を高橋美久二氏の御協力で行い、小型仿製鏡のレントゲン写真撮影を橋本清一氏にお願いした。御協力を得た方々に記して感謝する次第である。なお、図化作業より4年の歳月がたった。多くの御教示・御配慮いただいた諸先生方に成文化が遅れたことをお詫びするとともに、長池古墳の位置付けについては、今後の検討課題としておきたい。

最後に、本報告作成の機会を与えて頂き、御校閲を賜った西谷眞治先生に御礼を申し上げ、本文の終わりとしたい。

（こいけ・ひろし＝当センター調査第2課調査第2係調査員）

注1　小池　寛「芝山遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第25冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1987では、芝山遺跡地内の(小)古墳群と呼称したが、和田晴吾氏も使用しておられるように、今後、「芝山古墳群」と名称を変更しておきたい。

注2　白木原和美「長池古墳発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1965)』　京都府教育委員会）　1965

注3　近藤義行「長池古墳」（『南山城の前方後円墳』龍谷大学文学部考古学資料室研究報告Ⅰ　龍谷大学文学部考古学資料室）　1972

注4　長池古墳は、後期の前方後円墳として広く認識されているが、これらの遺物は、古墳時代前期の特徴を持つものである。今後、これらの遺物を整理し、墳丘成立時期を検証したい。

注5　田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古クラブ　1966

注6　和田晴吾「古墳時代の時期区分をめぐって」（『考古学研究』第34巻第2号　考古学研究会）1987

注7　室賀照子「琥珀は語る…古代アンバールートを探る…」（『末永先生米壽記念獻呈論文集』坤　末永先生米壽記念会）　1985

注8　山中　章・宮原晋一・中塚　良・不破　隆・秋山浩三・白井宏子・弘田和司「物集女車塚」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第23集　向日市教育委員会）　1988

注9　増田孝彦・森　　正「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡　昭和61・62年度発掘調査概要(1)高山古墳群・高山遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第29冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1988

注10　平良泰久「南山城の後期古墳と氏族」（『京都考古』第14号　京都考古刊行会）　1975

注11　小池　寛「低墳丘方形墓小考－用語の概念規定－」（『京都府埋蔵文化財論集』第2集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1991

注12　和田晴吾「南山城の古墳－その概要と現状－」（『京都地域研究』Vol.4　立命館大学人文科学研究所）　1988

平成２年度発掘調査略報

17. 蔵ケ崎遺跡

所 在 地　与謝郡加悦町字明石小字蔵ケ崎他

調査期間　平成２年11月１日～平成３年３月13日

調査面積　約500㎡

はじめに　今回の調査は、京都府土木建築部の依頼をうけて、一般国道176号の道路新設改良事業に伴い実施した。今回発掘調査を行った地点は、西に向かってのびる低台地の先端にあたる。この低台地上では、昭和40年代に区画整理を行った際に、多数の弥生時代前期の土器が出土しており、丹後地域でも数少ない弥生時代前期の遺跡として、注目されていた。今回は、土器が出土した地点のすぐ西側の沖積地に道路建設が計画されたため、まず試掘調査を行い、遺構・包含層を確認した地点について一部拡張調査を行った。

調査概要　今回調査を行った地点では、奈良時代と弥生時代前期の２時期の遺構を確認できた。上層奈良時代の遺構は、東西に流れる自然流路で、多数の木製部材が出土した。

下層の遺構としては、弥生時代前期の小流路を１条検出した。調査地の中をほぼ南北方向で、途中で何度か屈曲しながら流れる。幅は、約1.2mで、深さは約40cmを測る。断面形は、緩やかな「U」字形を呈する。流路内からは前期の土器のほか、多数の木材が出土した。このなかには、二又の農具(鋤？)があり、前期の農具として注目すべき資料である。

調査地位置図（1/50,000）

また、前期包含層からは、ノミ形石斧が出土した。全長18cmを測る完形品である。

まとめ　京都府北部では、弥生時代前期の遺構を確認したのは、峰山町途中ケ丘・扇谷遺跡のみで、今回の成果はこの地域の弥生時代前期を考える上で重要な位置を占める。また、出土土器も、丹後地域の前期土器の基準資料となる。今年度引き続き、東側の低台地にかかる部分の調査を予定しており、集落域の一端の確認が予想される。　（森　正）

18. 左坂古墳群

所 在 地　中郡大宮町字周枳小字幾坂ほか

調査期間　平成２年８月16日～平成３年３月７日

調査面積　約1,500㎡

はじめに　今回の発掘調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の周枳団地の造成工事に先立ち、同局の依頼を受けて実施した。

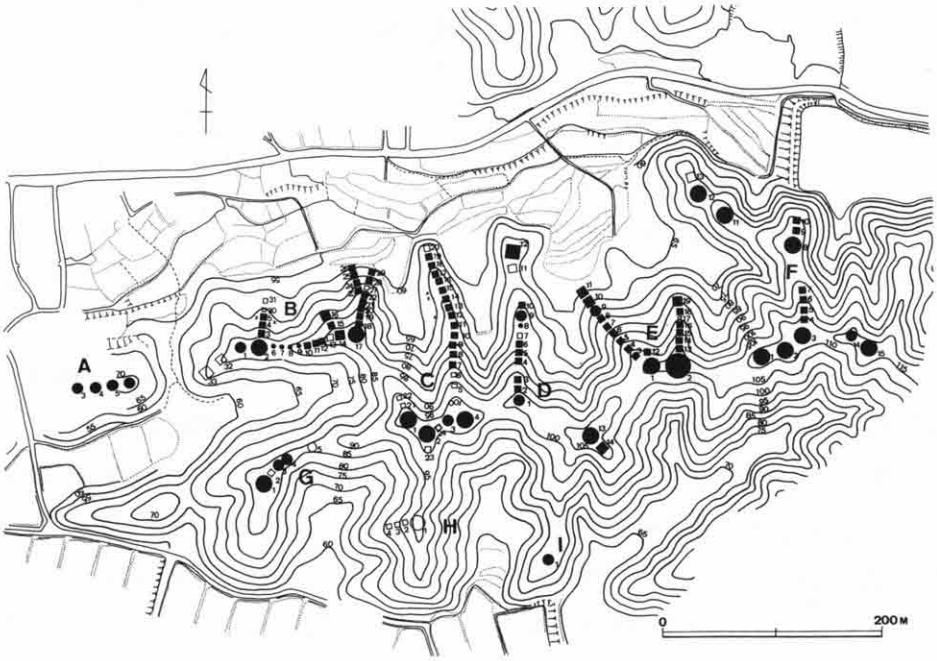
左坂古墳群は、竹野川上流域東岸に位置し、同一丘陵上には総数115基に及ぶ古墳が確認されている。今回は便宜上Ａ～Ｉの９地区に支群分けし、各古墳に番号を付した。今年度の調査では、造成工事にかかる尾根先端部分に位置する古墳、Ｅ-９～11号墳・Ｄ-12号墳・Ｃ-14～20号墳の、計11基の調査を行った。なお、当調査研究センターの調査に先行して京都府教育委員会によりＢ-15・16、18～29号墳の調査が行われている。

調査概要

Ｃ支群　先端から20～14号墳、計７基の調査を行った。墳丘は18号墳が東側にわずかな盛土を有する以外は、地山成形による一辺約８～10ｍを測る方墳である。17号墳を除き、高所側に溝を切り区画されている。20号墳は近世墓として利用されていたため、主体部はすでに削平され、検出することはできなかったが、主体部を検出することのできたものは、いずれも、木棺直葬形態をとるものであった。棺の形態には通常の箱形木棺のほか、船底状底部を有する木棺が認められる。出土遺物には墳丘から出土した土師器・須恵器のほか、副葬品として、18号墳から鉄鏃・鉄刀・刀子及び渦巻き状の不明金属製品、16号墳から鉄鏃・刀子、15号墳から鉄斧・「Ｕ」字状鋤先などの農工具とともに鉄滓が、それぞれ出土した。今回調査したＣ支群６基の古墳は出土遺物からみて、５世紀中葉から６世紀前半にかけ、尾根高所から先端に向かい築造されたと考えられる。

第１図　調査地位置図(1/50,000)

Ｄ支群　先端から12号墳・11号墳の２基を対象に調査を行った。当初、古墳状隆起である可



第２図　左坂古墳群分布図

能性が考えられたため試掘を行ったところ、12号墳については古墳であることを、11号墳については自然地形であることを確認した。12号墳は一辺約15mを測る方墳であり、墳丘は地山成形による。後世の削平のため主体部の残存状況は極めて悪かったが、木棺直葬形態をとるもの１基を検出した。副葬品として、鉄刀１口・瑪瑙製勾玉・ガラス小玉50点以上を検出した。また、墳丘から土師器・須恵器が出土した。これらの出土遺物からみて、D-12号墳は５世紀後半頃に築造されたものと考えられる。

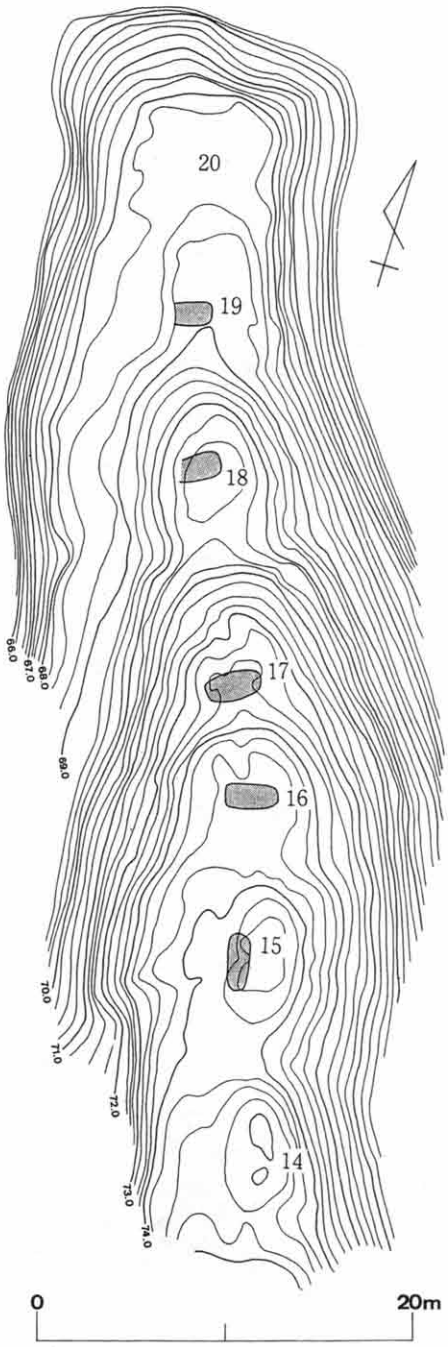
Ｅ支群　先端から11～９号墳、計３基の調査を行った。11号墳の主体部はすでに流失していたが、９・10号墳で主体部を検出することができた。10号墳は一辺約８ｍを測る方墳であり、墳丘は盛土による。主体部は４基を検出した。いずれも、全長1.7～2.2m・幅0.5～0.9mを測る土壙墓であり、赤色顔料以外の副葬品は認められなかった。９号墳は盛土による径約10mの円墳であり、３基の主体部を検出した。いずれも、木棺直葬形態をとるものであり、副葬品として鉄鏃・刀子が出土した。棺の形態は最初の主体部が箱形木棺であり、後続する２基の主体部には船底状底部を呈する木棺が用いられている。Ｅ支群２基の古墳は出土遺物からみて５世紀中葉に築造されたものと考えられる。

まとめ　今回、調査した11基の古墳は古墳時代中期から後期にかけての築造であり、横穴式石室に先行する群集墳であることが明らかになった。近年、竹野川流域を中心に丹後

半島ではこのような、いわゆる、初期群集墳の調査例が増加しているが、今回の調査でも新たな資料を追加することができた。また、今後、丘陵稜線上に立地する古墳を含め、古墳群の大部分を調査する予定であり、このような群集墳の実態をより詳細に検討する資料を得ることができるものと思われる。

また、C-15号墳から鉄滓が出土したことは、この古墳の築造時期である５世紀中葉から後半には、丹後で、鉄器あるいは鉄素材自体の生産が行われていたことを示す資料となり、古墳時代の製鉄遺跡である遠所遺跡群との関連など興味深いものである。今後、科学的な分析などを行い、詳細に検討していく必要があるものと思われる。

（石崎善久）



第３図　C－14～20号墳地形図(1/400)

19.　荒堀遺跡

所 在 地　天田郡夜久野町大字大油子小字荒堀

調査期間　平成２年11月27日～平成３年２月13日

調査面積　約450㎡

はじめに　荒堀遺跡は平成２年度の府道改修に伴い、京都府土木建築部の依頼を受け、当調査研究センターが調査を実施した。現地調査には調査第２課調査第１係長水谷寿克、同調査員野島永が担当した。明確な遺構として中世の土壙墓が確認できた。

調査概要　調査は前述したように府道の改良工事に伴うもので、東西に細長い調査区域となったため、東西に細長い調査区を設定した。第１トレンチでは表土層直下にピットや中世の土壙墓などを検出した。第２・第３トレンチでは表土下に黒褐色粘質土層が堆積しており、縄文から奈良時代の各時期の遺物が包含されていた。縄文時代としては打製石斧と石鏃がある。弥生時代では打製石鏃や第４様式の土器細片などが検出された。黒褐色粘質土層下に黄褐色砂質土が堆積しており、ピット等が検出されたが、遺物等は伴っていなかった。また、部分的に川原石の礫混じり層が下層に堆積しており、遺構の遺存状況は悪く、建物等の明確な柱穴跡は認められなかった。なお、第１トレンチ西側の第５トレンチで深掘りした結果、川原石の礫層が２m近く堆積し、下層遺構の存在は認められなかった。

まとめ　今回の調査では、出土遺物は各時期にわたるが遺構に伴う遺物が少なく、遺構の時期や性格が十分に検討できなかったが、第３トレンチのピットなども第１トレンチの遺構とほぼ同じく、平安から鎌倉時代になると思われる。そのため、調査地が牧川の川原から居住地や墓地などに利用され始めたのが平安時代後半から鎌倉時代にかけてで、それ以前は今回調査地の北側丘陵裾部が利用されていたと推測できるであろう。なお、先回の荒堀遺跡の調査では縄文時代の土器が出土したが、今回はまったく認められなかった。　（野島　永）

調査地位置図（1/50,000）

20. 天 若 遺 跡

所 在 地　船井郡日吉町字天若小字森形ほか

調査期間　平成２年８月６日～平成３年１月30日

調査面積　約2,000㎡

はじめに　天若遺跡の調査は、日吉ダムの建設が計画され、水没地となることから、水資源開発公団の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが行ったものである。平成２年度は、試掘調査の結果を受けて、約2,000㎡について本調査を実施した。

調査概要　元年度試掘調査の１トレンチ周辺を拡張した。試掘調査では、竪穴式住居跡３棟、柱穴などが検出された地域である。

今年度の調査結果、検出した遺構には竪穴式住居跡５棟、掘立柱建物跡６棟以上、井戸跡１基をはじめ多数の土坑や柱穴がある(第２図)。

まとめ　これまでの調査で、６世紀前半期の竪穴式住居跡５棟、７世紀後半期の土坑、８世紀前半期の井戸跡、及び奈良時代から平安時代にかけてと思われる掘立柱建物跡数棟

第１図　調査地位置図(1/50,000　京都西北部)

SB9022
SB9026
SB9024
SB9021
SB9023
SB9025
SK9006
SK9007
SK9005
SH9004
SH9002
SH9001
SH9003
10m
0

第２図　検出遺構実測図

を検出した。また、遺物の中には、旧石器時代ないしは縄文時代の石器・石片や、弥生時代及び古墳時代前半期の石器がある。このことから、比較的古くからの人々の営みがあり、古墳時代後期には集落が形成されていたことが確認できた。今後の調査範囲の拡大につれて、空白時期の遺構・遺物の発見や、各時期の集落構成が明確になっていくことが期待される。

今回の調査では、古墳時代後期前半期や奈良時代から平安時代にかけてと思われる居住区域を確認した。また、７世紀後半期の土坑ＳＫ9006や８世紀前半期の井戸跡ＳＥ9015の存在から、同時期の住居跡が付近に存在することも予想される。特に、今回検出した数棟の掘立柱建物跡の中にはこの井戸跡に伴う掘立柱建物跡がある可能性が強い。なお、現時点までに復原できた掘立柱建物跡の棟軸方向は、大きく２分することができ、少なくとも２時期にわたって建物跡が構成されていたことが予想される。

古墳時代後期後半の集落跡を確認したことにより、天若遺跡が丹波山地の谷間に位置するにもかかわらず、この地域の開発が比較的早くから行われていたことが確かめられた。大堰川の最上流地域である周山盆地の地域は、遅くとも弥生時代には開発が行われていたことが知られている。天若遺跡は、この周山盆地と亀岡盆地とを繋ぐ交通の要衝にあたっていたものと考えられる。

奈良時代から平安時代以降には、周山地域から長岡京や平安京に向けて、木材を搬出していたことが知られている。この木材の運搬方法は、大堰川を利用した筏流しであったと考えられる。筏流しは、ごく最近まで行われていた木材運搬の方法でもある。天若遺跡は、この木材搬出の中継地点もしくは木材の搬出地点であったものと思われる。

旧石器時代ないしは縄文時代及び弥生時代の石器や石片が採集されたことからも、付近で住居跡などの遺構が存在する可能性が高くなった。試掘調査で、この時代の遺構・遺物が検出されていないことからすれば、大規模な集落跡ではなく、キャンプ・サイト的な遺跡と予想される。

また、天若遺跡は谷間に位置しており、他の地域とはある程度隔絶された小宇宙を形成していたものと考えられる。今回までの調査では、集落内の居住区域を確認したものの、墓域や農耕区域については不明な点が多い。古代の集落構造や集落の変遷を知るうえで、徹底した調査が必要となろう。

（三好博喜）

21.　長岡宮跡第250次

（7ＡＮ18Ｆ地区）

所 在 地　向日市寺戸町天狗塚

調査期間　平成２年11月12日～平成３年３月４日

調査面積　約330㎡

はじめに　今回の調査は、長岡宮域の西端を画する位置に当たり、これに関連する遺構・遺物の検出を主な目的とした。また、「天狗塚」という字名からも古墳の存在が予想された。調査は、競輪場選手宿舎の建設に伴うものであり、競輪開催日は作業を中断した。調査トレンチは、長岡宮域の西限が中央部で検出されるように設定した。

調査概要　調査の結果、８世紀末の溝をはじめ、近世の土坑・地境溝等を検出した。溝からの出土遺物は、土器類が大半であるが、きわめて珍しい須恵質の円面硯も出土した。

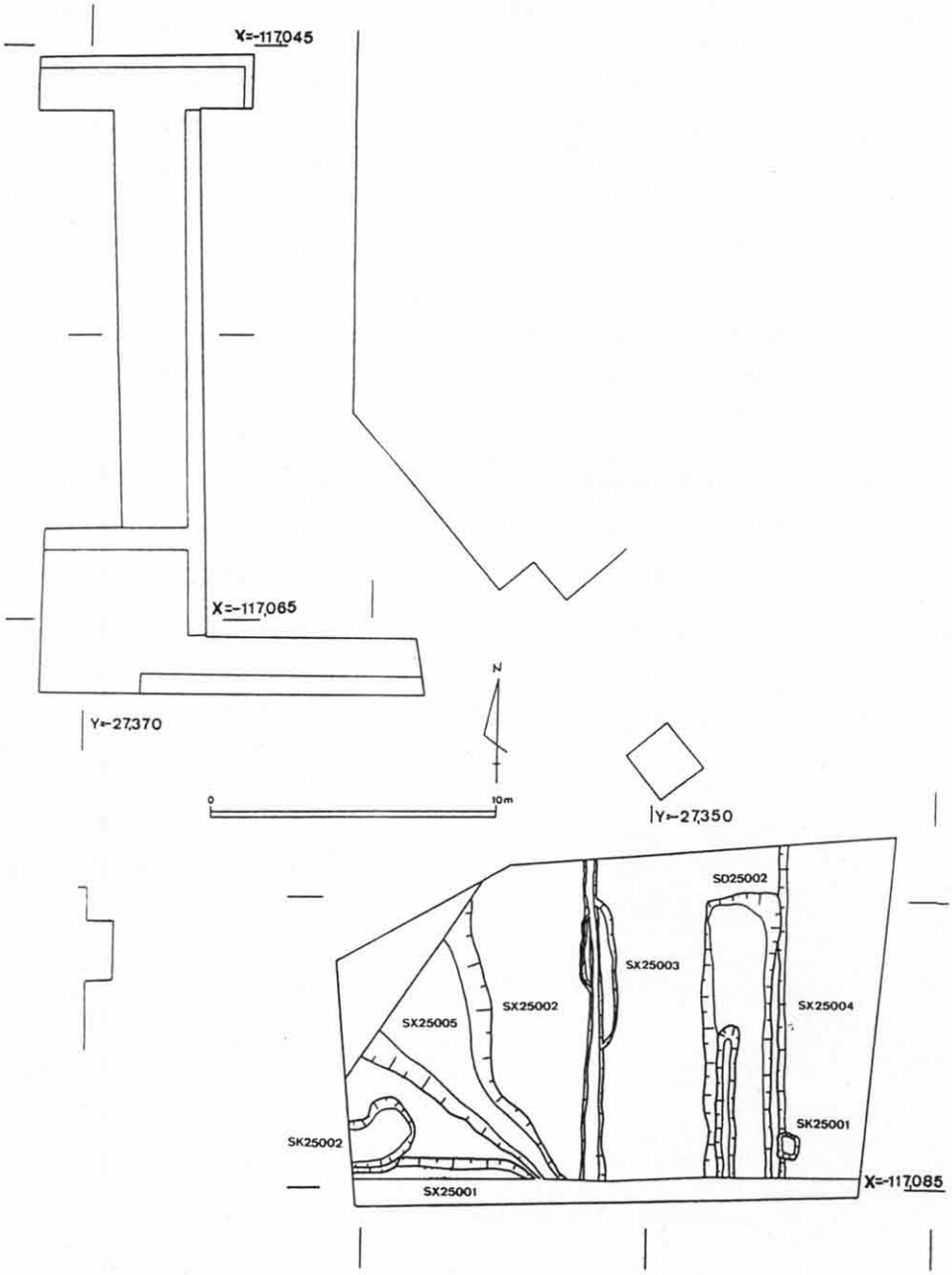
ＳＤ25002は、トレンチ東半部で検出した南北方向の溝である。溝幅は、約2.2m・深さ0.3mを測り、北端で途切れる。溝内の西辺には細い溝が一段深く(0.2m)掘られている。溝の堆積土は、暗灰褐色粘質土で、炭化物・焼土等が混在し、多くの土器類が含まれる。出土遺物は、須恵器・土師器類が大半を占め、杯・蓋・皿・椀・高杯・甕等の器形がある。小型の円面硯は、口径5.8cmを測り、陸部と海部は明瞭に分かれ、海部は幅５mmで一周する。圏脚部は破損が著しいが、細い透かしは14本を数える。

ＳＤ25002以外の遺構はすべて近世・近代のもので、土の抜き取り穴・地境溝等がある。その一つにＳＸ25001がある。これは、南北方向の地境溝であるが、土採りも兼ねている。しかも、以前の地形を踏襲している点で注目される遺構である。

第１図　調査地位置図（1/25,000）

おわりに　溝ＳＤ25002は、出土遺物から長岡京期に属し、明らかに人工的なものである。溝の性格については、排水溝とも考えられるが、むしろ地域を画する溝と考えられる。溝の位置は、条坊復原での西一坊大路の東側溝（Ｒ7701）とほぼ一致することから、長岡宮域の西限に関わる遺構の一つと考える。

（竹井治雄）


X=-117,045
X=-117,065
Y=-27,370
N
0
10m
Y=-27,350
SO25002
SX25003
SX25002
SX25005
SX25004
SK25001
SK25002
SX25001
X=-117,085

第２図　検出遺構図

22. 伏見城跡

所在地　京都市伏見区桃山毛利長門西町

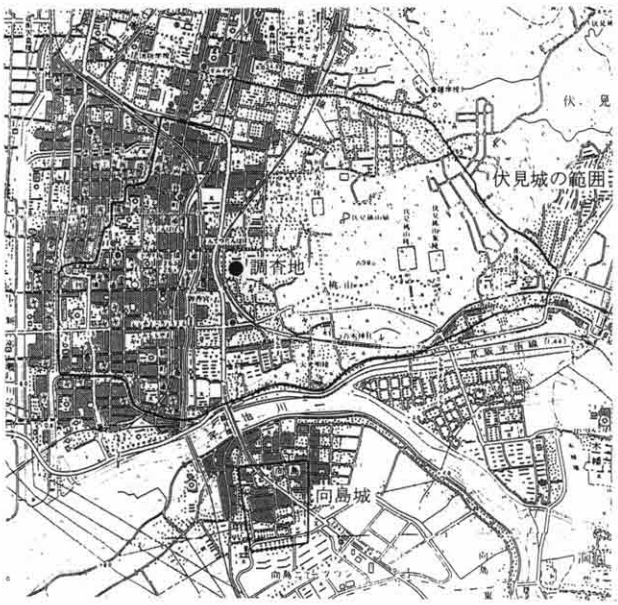
調査期間　平成２年10月29日～平成３年２月27日

調査面積　約1,000㎡

はじめに　今回の調査は、京都府総合教育センターの講堂棟（仮称）の建設に伴い、京都府教育委員会の依頼を受けて実施したものである。調査地は毛利安芸守（輝元）の下屋敷の想定地付近にあたる。

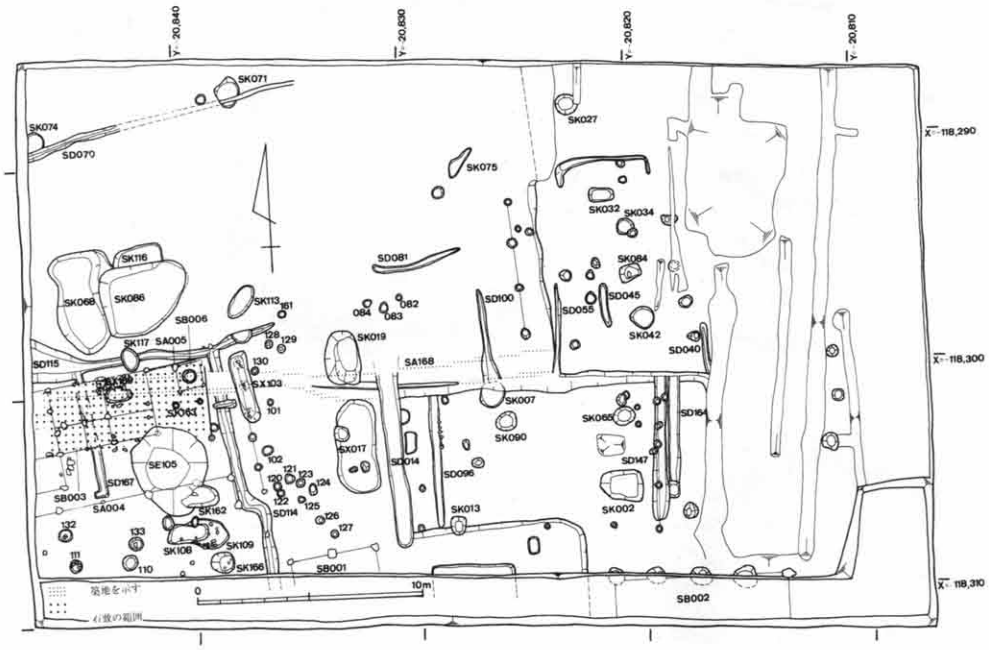
調査概要　調査地の基盤は大阪層群である。調査は近・現代の整地土を除去することから開始した。整地土は薄いところで約５cm、厚いところで約40cmある。この土を取り除くと16世紀末から17世紀初頭にかけての遺構面が広がっていた。遺構面は少なくとも２時期に分けられる。Ⅰ期の遺構には礎石建物跡ＳＢ001、礎石建物跡ＳＢ003、礎石小建物跡ＳＢ006、土坑ＳＫ068、土坑ＳＫ086、土坑ＳＫ116、溝ＳＤ114、溝ＳＤ115、溝ＳＤ167、井戸ＳＥ105、板塀ＳＡ005、竈ＳＸ169がある。

礎石建物跡ＳＢ003は、柱間寸法2.04mを測る「Ｌ」字形の建物跡である。礎石は１間ごとに人頭大の平石、半間ごとに拳大の石を用いている。主軸は真北を向く。建物跡は調査地西方に展開するため全体規模は不明である。この建物は溝ＳＤ167と竈ＳＸ169の周囲を除き石敷土間となり、大きな建物跡の台所部分と考えられる。礎石小建物跡ＳＢ006は、四隅に人頭大の平石を置いた一辺約１mの建物跡である。



第１図　調査地位置図（1/50,000）

この建物跡の中央には、直径約60cm・深さ約20cmを測る、底面が平坦となる土坑ＳＫ163があ



第２図　調査地平面図

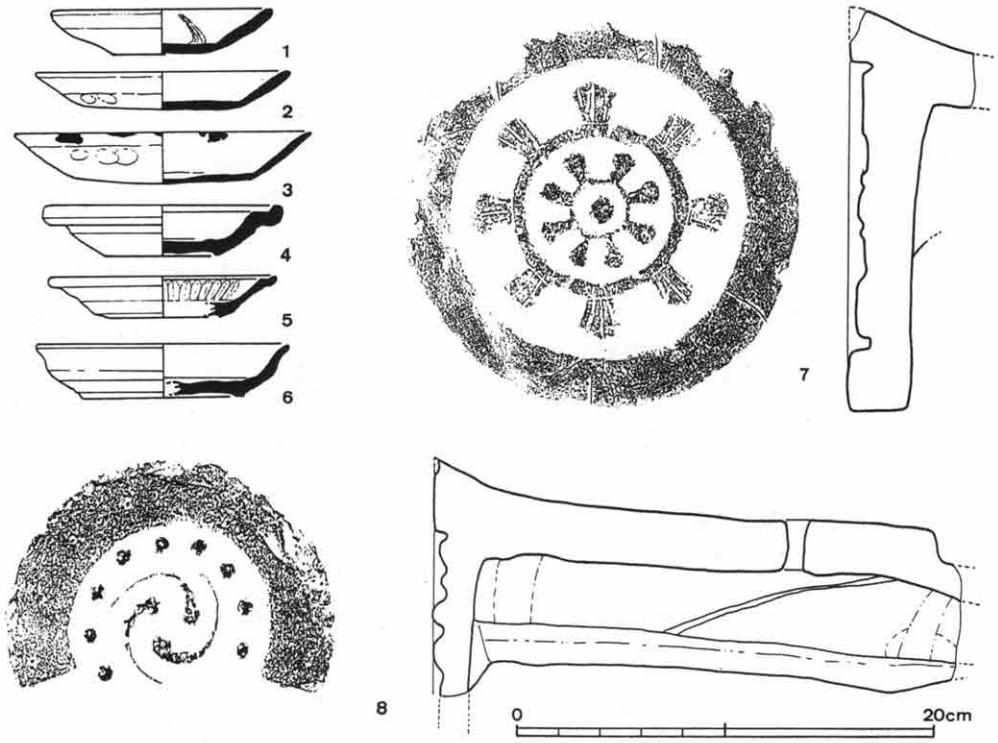
る。土坑ＳＫ068は長軸4.3m・短軸1.9m・深さ0.61mを測る不正楕円形を呈する。この土坑は礎石建物跡に伴うゴミ穴と思われる。出土遺物には多量の土師器皿(第３図２)をはじめ、瀬戸・美濃皿、備前焼すり鉢といった国産陶器、金箔押軒丸瓦(第３図７)、丸瓦、サザエの貝殻などがある。この土坑と切り合い関係を持つ土坑ＳＫ086、土坑ＳＫ116も同様のゴミ穴である。この３基の切り合い関係は土坑ＳＫ086が土坑ＳＫ068と土坑ＳＫ116を切っており、時間的に新しい。

溝ＳＤ114と溝ＳＤ115は、礎石建物跡ＳＢ003を画する南北及び東西溝である。溝ＳＤ114からは金箔押巴文軒丸瓦(第３図８)が出土している。井戸ＳＥ105は長軸4.1m・短軸3.15mを測り、断面が漏斗状を呈している。出土遺物には土師器皿、軒丸瓦・軒瓦・平瓦や美濃・瀬戸(第３図６)、唐津、備前などの国産陶器のほか、中国明代の染付などがある。

板塀ＳＡ005は、幅８cm、東西の長さ160cm、南北は240cm、深さ18cmを測り、礎石建物跡ＳＢ003の北東端を示す板塀である。

竈ＳＸ169は、礎石建物跡ＳＢ003の北側に位置する。掘形の長軸110cm・短軸67cmを測り平面楕円形を呈する。焚き口は東側を向く。

次に、Ⅱ期の遺構には礎石建物跡ＳＢ002、築地ＳＡ168などがある。礎石建物跡ＳＢ002は調査区南側の断ち割り部分にかかって東西４間を検出した。東端の礎石は長径60cm・短

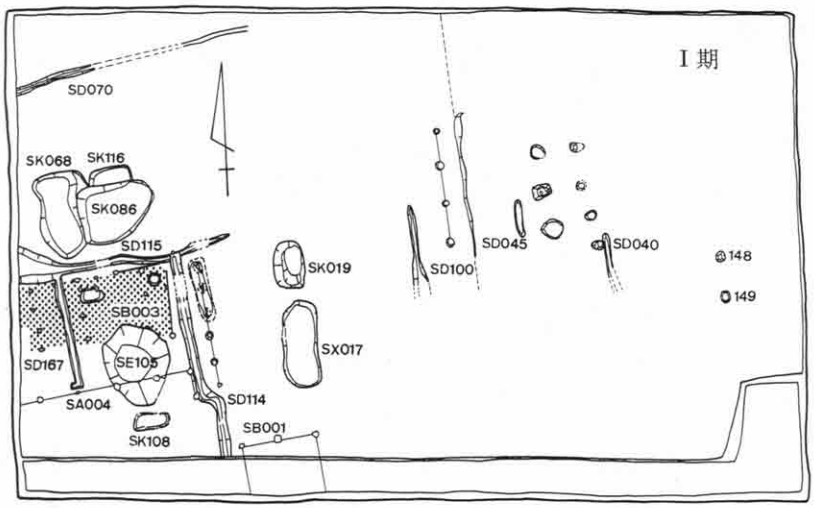


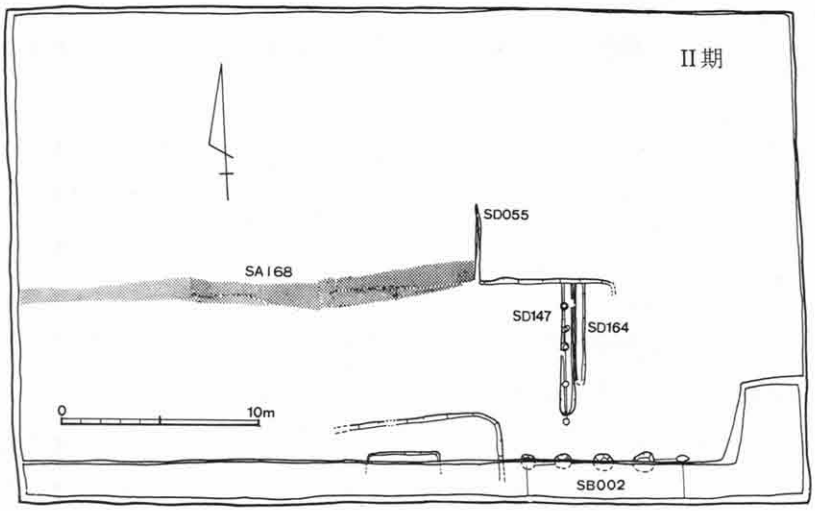
第３図　出土遺物

径35cmを測る。柱間は197cm（６尺５寸）であり、主軸は真北から東へ約９°振っている。築地ＳＡ168は東西の長さ約29m・幅約１ｍ・高さ約0.3mを測る。この築地は版築によって造られており、Ⅰ期の遺構を覆っている。

まとめ　今回の調査では検出遺構をⅠ期とⅡ期に分けている。これは礎石建物跡ＳＢ003と溝ＳＤ115の一部分に広がっていた焼土を基準に下層の遺構をⅠ期、上層の遺構をⅡ期とした。しかしⅠ期、Ⅱ期の実年代を比定し得る資料は得られなかったが、①Ⅰ期の遺構は最高約40cmの整地層によって完全に覆われていること、②Ⅱ期の遺構はこの整地層の上に存在すること、③遺構の向きが真北と磁北に向く相違があることなどⅠ期とⅡ期の間には隔絶した変化が見られる。以上の３点から推定するとこの大規模な地業は徳川氏によるものと思われる。Ⅰ期の遺構が比較的良好に遺存している理由は慶長５(1600)年の関ケ原の合戦で家康が勝利をおさめ、政権が豊臣氏から徳川氏へ移行した際に徳川氏が整地により埋め戻したためと思われる。また、Ⅱ期の遺構が礎石建物跡１棟と築地そして雛壇状の段差などが存在するのみで遺存度が低いのは、３代将軍の家光が「一木一草たりとも破壊せよ」という厳命を出したことによるだろう。

今回の発掘調査では屋敷建物の一部が確認されたにすぎない。伏見城跡の調査は小規模





第４図　主要遺構変遷図

なものが多いために遺構の実態はつかめていない。過去における伏見城関連の調査においても16世紀末から17世紀初頭の遺構は細分されておらず、この時期の地割り状況はまったく不明であった。(注１) こうした中で一部なりとも性格の判明する建物跡、地割りの変化を確認したことは大きな成果といえる。

（柴　暁彦）

注１　原山充志・小森俊寛『京都市埋蔵文化財調査概要』　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1988

府内遺跡紹介

51.　笠置寺旧境内

笠置寺は、木津川の南岸に所在する笠置山の頂部にある。現在は、真言宗(智山派)の寺院であるが、元来は法相宗で、中世には修験道の道場として栄えた。

創建については、不明なことが多く詳しくわかっていないのが現状である。この寺には『笠置寺縁起』などがあるが、南北朝期以降の成立と考えられており、創建の記述は信用できるものではない。現在のところ、笠置寺の創建に関する史料は、『東大寺要録』・『帝王編年記』・『伊呂波字類抄』・『今昔物語』などがある。

このうち、『東大寺要録』巻六末寺章第九では、「笠置寺、右寺天智天皇第十三皇子建立、有縁起、」とあり、『帝王編年記』巻九には、「(天智)三年甲子、天人降造笠置石像弥勒」とあって、いずれもその草創を天智朝においている。また、『伊呂波字類抄』では、「天智天皇皇子狩猟之間」とされ、『今昔物語』でも「天智天皇の御代に大友御子在しましけり」ではじまっていて、やはり天智朝の物語とした。これらのうち、『今昔物語』や『伊呂波字類抄』以外はここに引用した程度の、非常に短い記事で、創建に関する詳しい契機などは全くうかがうことができない。

『今昔物語』と『伊呂波字類抄』は、内容的にはほとんどかわらないものである。その内容は、天智天皇の皇子(『今昔物語』では大友皇子とする)が鹿狩で鹿を追っていた際に、崖で進退がきわまり、山神に祈ってことなきをえたことにより、後に石に弥勒尊像を刻み本尊として建立したというものである。これは、説話として伝えられたもので、神に祈って助かったといった内容をもっていることから、史実と認めることはできない。むしろ、中世になって、すでに本尊になっていた石仏をもとにこのような伝承が次第に形成され、寺の起源を天智朝に求めたのかもしれない。これとは別に『笠置寺縁起』では、単に白鳳11年の創始とするだけで、何に基づいているのかは明らかでない。

遺跡所在地(1/50,000)

このように、草創についてはほとんどはっきりと記した史料はない。ただ、『枕草子』に「寺はかさぎ」とみえることから、10世紀末～11世紀には確実に存在していたことは確かめられる。そうすると、むしろ、８世紀の東大寺造営に際し、材木を伊賀国から木津川を通じて運搬するが、その通過点として笠置山が注目されたのが起源になったと考えることも可能であろう。『笠置寺縁起』では、良弁が笠置寺の千手窟にこもって船を通す秘法を修したと伝える。むろん、これは史実ではないが、東大寺の造営に対して、水上交通の難所としての笠置山あたりが注目され、信仰を集めたことを示しているともみれなくはない。東大寺との関係が深いのも草創と関わったからと理解する方がよかろう。

平安時代に入ると、修験道の道場として栄え、金峯山と並び称されるようになった。このころには、院や摂関の参詣も行われるようになる。藤原道長や宗忠は、一族とともに参詣したことが『御堂関白記』や『中右記』にみえている。また、『百練抄』永延元(987)年10月17日条に、「院参詣長谷寺、笠置寺、七大寺」とあり、花山法皇も笠置寺に参詣している。このことは、笠置山や笠置寺が王朝国家の支配者による尊崇を受けていたことを意味し、中世以後に発展する契機となったようである。

中世には修験道の中心道場となり、国家・民間を問わず尊崇をうけた。特に、興福寺僧の貞慶がこの笠置寺に入山してからは隆盛期を迎えることになった。また、鎌倉時代の初めには俊乗坊重源による東大寺の復興事業が行われるが、この重源が笠置寺に銅鐘を寄進している。このことは、８世紀から続く東大寺と笠置寺の関係を考えれば当然かもしれない。この銅鐘は現存しており、銘文には「建久七年丙辰八月十五日　大和尚　南無阿弥陀仏」とあるように、重源による寄進をうかがわせる。

このように、中世には大発展し、現在でもこのときの貞慶を中興の祖と仰いでいる。この時期の笠置寺の寺域は、『笠置寺縁起』によれば「東限野野目河、西限小倉河中仏石、南限阿多恵谷、北限牓示河原」とあり、広大なものとなっている。

こうして発展してきた笠置寺ではあるが、元弘の乱が起こると、後醍醐天皇はこの地に行宮を設けて幕府軍と対峙することになった。この時の戦乱によって、ことごとく焼き払われて、「千手堂六角堂大湯屋」以外はすべて灰燼に帰したと、『笠置寺縁起』に書かれている。むろん、縁起のいう内容であるので、ある程度は割り引きして考える必要はあろうが、３か月にもわたる戦闘が行われたので、相当荒廃したことは確実であろう。この部分に関する『笠置寺縁起』の記述は、ある程度は史実を伝えていると思われる。

その後、本堂が一旦再建されたものの、またすぐに焼失してしまったようで、ようやく文明年間(1469～1487)になって貞盛が出て勧進し、本堂・毘沙門堂・大師堂などが造営されている。これ以後は、勧進による再建が進められた。

近世にはいると、元和５(1619)年に藤堂氏が領地としてこの笠置の地を支配するようになると、笠置寺の荒廃を嘆いた藩主藤堂高次の手により弥勒殿が再興されたのをかわきりに、次々と再建されるようになり、寺域内に不動院・知足院・多聞院・文珠院・福寿院の５坊が存在するようになった。寺領も藤堂氏から15石の寄進を受けており、これらの坊のうち、不動院・知足院・福寿院の三坊で分けられている。

このように、近世は、藤堂氏の保護の下に修理料などを名目として田畑が寄進されたりした。しかし、明治維新の時期を迎えると、このような保護がなくなったので、寺の維持・管理は壇家衆が行っていたが、明治９(1876)年以降、住職を中心に少しずつ復興されていった。

現在は、藤堂氏が復興した５坊のうちの福寿院が笠置寺と名称を変えて、存在している。室町時代以後に漸次復興された堂宇もいくつか残っており、特に、先に触れた重源寄進の銅鐘は重要文化財に指定されており、また、室町時代初期の作と伝えられている石造三重塔も同じく重要文化財に指定されている。その他、弥勒石仏や磨崖仏など、修験道に関連する遺構も数多く残されており、この時代の笠置寺の状況を伝える重要な資料となっている。

（土橋　誠）

＜参考文献＞

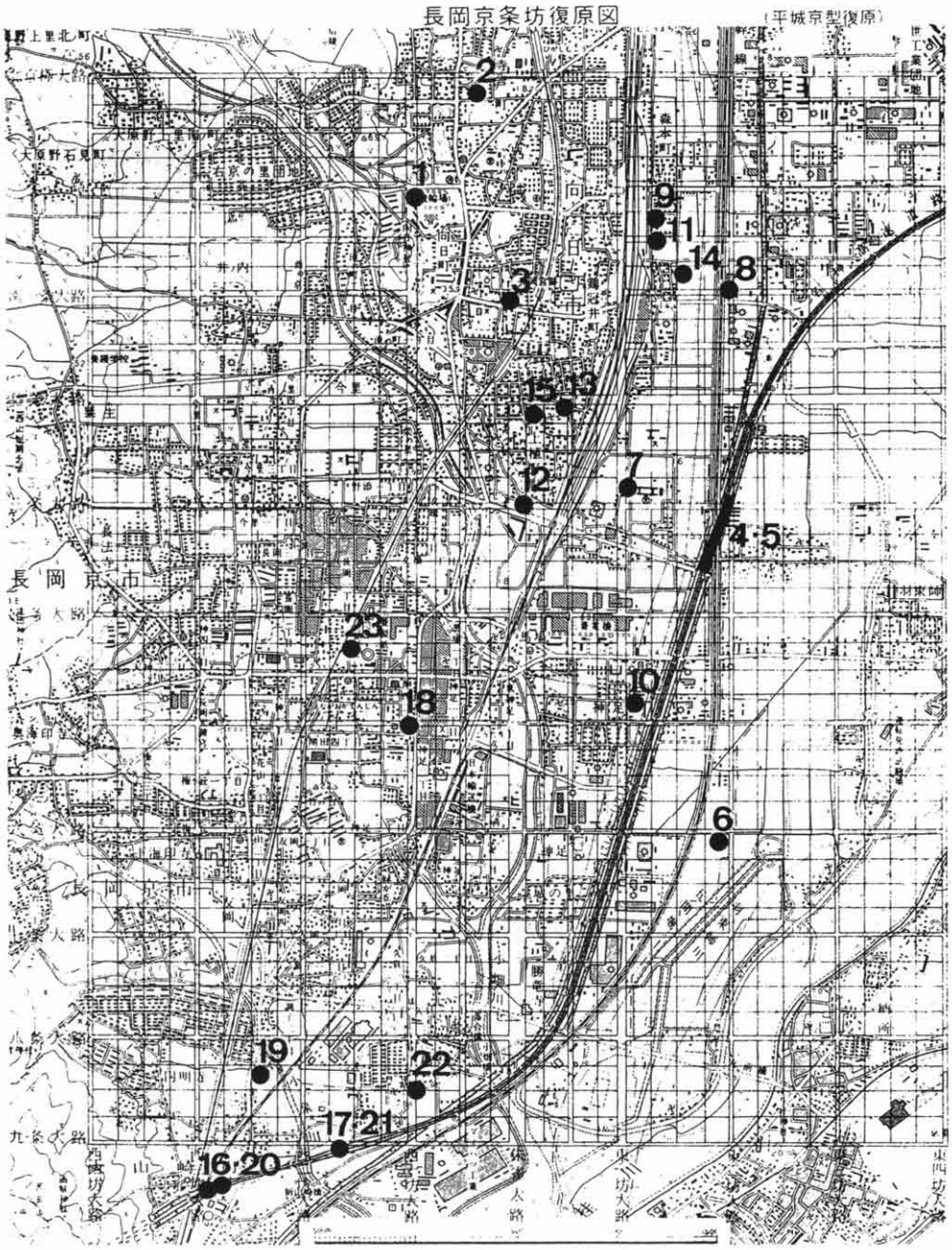
佐藤虎雄「笠置山の史蹟及び名勝」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第11冊　京都府) 1930
荻野仲三郎「京都府笠置山」『史蹟調査報告』7　1935
中村直勝「笠置山に史蹟を聞く」(『史迹と美術』15－７　史迹美術同攷会)　1944
岡本和重『笠置山の景勝と史跡』　1962
『日本城郭大系』11　新人物往来社　1980
『京都府の地名』　平凡社
中井　均「南山城地方の中世城郭跡」(『城』113　関西城郭研究会)　1982

長岡京跡調査だより・37

平成３年２月27日・３月27日・４月24日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮域３件、左京域12件、右京域8件の計23件であった。これら23件の調査地は、位置図・一覧表のとおりである。このうち、主なものいくつかについて、調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表　　(1991年４月末現在)

番号	次　数	地　区　名	調　　査　　地	調 査 機 関	調査期間
1	宮内250次	7AN18F	向日市寺戸町天狗塚	㈶京都府埋文	11/13～3/2
2	宮内254次	7AN11Q	向日市寺戸町中垣内27	㈶向日市埋文	2/4～3/23
3	宮内255次	7AN14U	向日市鶏冠井町秡所41－3	㈶向日市埋文	4/1～4/20
4	左京241次	7 ANXYT・XKM	京都市伏見区羽束師菱川町山縄手・小角	㈶京都府埋文	4/9～3/6
5	左京242次	7ANFSK－3・FMI－5・FWD	向日市上植野町	㈶京都府埋文	4/9～3/6
6	左京251次	7ANYTH－1	京都市伏見区淀水垂町	㈶京都市埋文	7/9～
7	左京257次	7ANFKE－3	向日市上植野町車返８	㈶向日市埋文	10/1～3/31
8	左京259次	7ANEHD－４	向日市鶏冠井町七反田14－1	㈶向日市埋文	1/7～1/26
9	左京260次	7ANDID－2	向日市森本町石田25	㈶向日市埋文	1/28～2/9
10	左京261次	7ANMKD－2	長岡京市神足神田15	㈶長岡京市埋文	2/18～
11	左京262次	7ANDID－3	向日市森本町石田８	㈶向日市埋文	3/8～3/27
12	左京263次	7ANFDE－6	向日市上植野町堂ノ前13－1	㈶向日市埋文	3/18～3/31
13	左京264次	7ANFJK－5	向日市上植野町浄徳17－1・5	㈶向日市埋文	4/8～4/24
14	左京265次	7ANEJK－2	向日市鶏冠井町上古8－1・13－1	㈶向日市埋文	4/1～9/30
15	左京266次	7ANFMM－2	向日市上植野町円山15－30・32	㈶向日市埋文	4/15～4/26
16	右京349次	7ANSIR・SDD	大山崎町円明寺百々・井尻	㈶京都府埋文	4/9～3/8
17	右京357次	7ANSID・TID-2・TKD	大山崎町円明寺壱町田・下植野飯田・上枚方	㈶京都府埋文	7/4～2/20
18	右京365次	7ANKST－3	長岡京市開田二丁目214・215	㈶長岡京市埋文	3/4～7/4
19	右京366次	7ANSKG－2	大山崎町円明寺金蔵2－1	大山崎町教委	3/25～4/1
20	右京367次	7ANSID－3	大山崎町円明寺百々・井尻	㈶京都府埋文	4/8～
21	右京368次	7ANSID－3	大山崎町円明寺壱町田他	㈶京都府埋文	4/8～
22	右京369次	7ANTMY	大山崎町下植野宮本５－３	大山崎町教委	4/15～4/22
23	右京370次	7ANKSN－5	長岡京市長岡二丁目429	㈶長岡京市埋文	4/22～6/21



▽番号は一覧表・本文()内と対応

調査地位置図

宮内第254次(2)　(財)向日市埋蔵文化財センター

北辺官衙及び殿長遺跡の調査である。江戸時代の整地層・井戸跡のほか顕著な遺構はないが、来迎寺境内庭石の石材調査中に2個の竜山石製の石棺材が見つかった。

宮内第255次(3)　(財)向日市埋蔵文化財センター

大極殿院西面回廊及び山畑古墳群の調査である。従前の推定位置から、回廊(複廊)柱の礎石抜取跡8か所(3間分)と雨落溝、回廊構築に伴う地業跡等が確認された。

左京第241・242次(4・5)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

左京三条一坊・二坊・四条一坊及び鶏冠井清水・芝ヶ本・鴨田の各遺跡を対象とする。名神高速道路拡幅に伴う、延長約1.8kmの調査対象区間から、弥生時代～中世の各時期の遺構・遺物が検出された。長岡京期の遺構としては、三条条間小路南北両側溝・東二坊大路東側溝・掘立柱建物跡・溝跡群等があり、特に三条条間小路は大路規模であることが確認された。平安時代に関しても遺物の出土量が比較的顕著であり、また、その下層で、弥生時代から古墳・奈良時代の遺物を伴う流路跡が検出された。

左京第257次(7)　(財)向日市埋蔵文化財センター

左京三条一坊十三町・二坊四町、東一坊大路、三条第二小路及び中福知遺跡の調査である。弥生・古墳時代、奈良～中世の各時期の遺構が検出され、多量の遺物が出土した。

長岡京期の遺構には、東一坊大路東西両側溝、三条第二小路南側溝、柵、土坑のほか、一坊十三町では、大路沿いにのびる築地跡とその下部施設の木樋を伴う暗渠溝が確認された。下層からは、古墳時代前半期の水田跡が検出されている。

右京第365次(18)　(財)向日市埋蔵文化財センター

右京五条二坊四町の調査である。西一坊大路西側溝と五条大路北側溝の交差点が確認され、両大路に挟まれた宅地跡から、掘立柱建物跡6棟、柵列、井戸、土坑が検出された。八花硯、石製巡方等が出土し、建物配置から、1／2町を占める家敷地が想定される。本調査地は、中山修一氏によって長岡京条坊復原のきっかけとなった場所である。　(辻本和美)

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧

（平成３年４月30日現在）

理事長

福山　敏男（京都大学名誉教授）

副理事長

樋口　隆康（京都府文化財保護審議会委員／京都大学名誉教授）

理　事

中沢　圭二（京都府文化財保護審議会委員／京都大学名誉教授）

川上　　貢（京都府文化財保護審議会委員／京都大学名誉教授）

上田　正昭（京都府文化財保護審議会委員／京都大学名誉教授）

藤井　　学（京都府立大学文学部教授）

足利　健亮（京都大学教養部教授）

佐原　　眞（奈良国立文化財研究所／埋蔵文化財センター研究指導部長）

都出比呂志（大阪大学文学部教授）

藤田　价浩（西芳寺貫主）

竹中　靖雄（京都府文化芸術室長）

木村　英男（京都府教育庁指導部長）

堤　圭三郎（京都府教育庁指導部理事）

監　事

吉田三枝子（京都府出納局長）

前川　靖典（京都府監査委員事務局長）

事務局長　松阪　寛支

次　長　中谷　雅治　小林　将夫

総務課

課　長　小林　将夫（兼）

総務係長　安田　正人

主　事　上田　幸正　杉江　昌乃

今村　正寿　木村　幸世

調査第１課

課　長　中谷　雅治（兼）

企画係長　平良　泰久

調査員　磯野　浩光

嘱　託　岩槻　廣司

資料係長　辻本　和美

主任調査員　松井　忠春

調査員　田中　　彰　土橋　　誠

調査第２課

課　長　安藤　信策

調査第１係長　水谷　寿克

主任調査員　増田　孝彦

調査員　岡崎　研一　森　　正

森島　康雄　石崎　善久

岸岡　貴英

調査第２係長　奥村清一郎

主任調査員　引原　茂治　伊野　近富

調査員　田代　　弘　三好　博喜

小池　　寛　鵜島　三寿

柴　　暁彦　野島　　永

調査第３係長　小山　雅人

主任調査員　戸原　和人　石井　清司

調査員　竹原　一彦　竹井　治雄

石尾　政信　黒坪　一樹

岩松　　保　伊賀　高弘

中川　和哉　鍋田　　勇

センターの動向（3．2～4）

1．できごと

2．5　堤　圭三郎理事、内里八丁遺跡（八幡市）現地視察

教育法人合同研修会（於：青年会館出席（松阪事務局長、小林次長、中谷次長ほか）

6　長岡京跡左京第241次（京都市）第242次（向日市）関係者説明会

8　宮津城跡（宮津市）関係者説明会

コンピューター委員会

足利健亮理事、内里八丁遺跡（八幡市）現地視察

13　宮本長二郎奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター建造物研究室長、八木嶋遺跡（八木町）現地指導

15　八木嶋遺跡現地説明会

宮津城跡発掘調査終了（12.17～）

16　第60回研修会（別掲）

18　高橋誠一滋賀大学教授、八木嶋遺跡現地指導

19　松阪局長、瀬後谷瓦窯（木津町）現地視察

20　上田正昭理事、八木嶋遺跡現地視察

伏見城跡（京都市）現地説明会

22　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議（於：大阪）出席（中谷次長、安藤課長、辻本係長）

左坂古墳群（大宮町）現地説明会

26　藤井　学理事、八木嶋遺跡現地視察

26　京都府教育委員会財務調査

27　伏見城跡発掘調査終了（11.7～）

内里八丁遺跡発掘調査終了（4.12～）

長岡京連絡協議会

3．2　蔵ヶ崎遺跡（加悦町）現地説明会

長岡京跡右京第349次・百々遺跡（大山崎町）長岡京跡右京第357次（大山崎町）現地説明会

4　川上　貢理事、八木嶋遺跡現地視察

樋ノ口遺跡（精華町・木津町）試掘調査開始

平安宮大極殿跡試掘調査開始

5　長岡宮跡第250次（向日市）発掘調査終了（11.13～）

桑飼上遺跡（舞鶴市）発掘調査終了（4.3～）

6　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議（於：京都市）出席（松阪局長、小林次長、中谷次長）

瀬後谷遺跡発掘調査終了（1.8～）

7　左坂古墳群発掘調査終了（8.16～）

8　八木嶋遺跡発掘調査終了（4.17～）

長岡京跡右京第349次・百々遺跡発掘調査終了（5.16～）

長岡京跡右京第357次発掘調査終了（7.4～）

10　スライドで見る乙訓の発掘(於：長岡京市)講師(岩松・中川調査員)

12　遠所遺跡発掘調査終了(4.3～)

蔵ヶ崎遺跡発掘調査終了(11.5～)

27　第30回理事会・役員会(於：京都堀川会館)出席(福山敏男理事長、樋口隆康副理事長、　松阪寛支常務理事、中沢圭二、川上　貢、上田正昭、藤井　学、足利健亮、佐原　眞、都出比呂志、藤田价浩、木村英男、堤圭三郎の各理事、岸　義次、前川靖典の各監事

3．27　長岡京連絡協議会

31　退職職員辞令交付(別掲)

4．1　新規採用職員辞令交付(別掲)

人事異動(別掲職員一覧表参照)

8　長岡京跡左京第241次(向日市)発掘調査開始

長岡京跡右京第349次・百々遺跡(大山崎町)発掘調査開始

樋ノ口遺跡(精華町、木津町)発掘調査開始

9　瀬後谷遺跡(木津町)発掘調査開始

14　長岡京跡右京第368次(大山崎町)発掘調査開始

15　遠所遺跡(弥栄町)発掘調査開始

天若遺跡(日吉町)発掘調査開始

平安宮大極殿跡(京都市)発掘調査開始

22　樋口隆康副理事長、瀬後谷遺跡現地視察

2．24　長岡京連絡協議会

共同研究採択委員会

2．普及啓発事業

2．16　第60回研修会(於：向日市民会館)－恭仁京と長岡京－久保哲正「加茂町恭仁宮跡南限の発掘調査」、中川和哉「長岡京跡左京三条一坊の発掘調査－平安時代初期の建物跡－」、吉崎　伸「長岡京跡左京の発掘調査－橋遺構と大量の墨書人面土器－」

3．人事異動

3．31　長関和男嘱託、石崎善久調査員退職

4．1　理事長・副理事長・常務理事・他の全理事及び監事再任

鍋田　勇・石崎善久調査員採用(京都府教育庁から派遣)

岩槻廣司嘱託採用

16　岸　義次監事退任

17　吉田三枝子監事新任

受贈図書一覧（3.2～3.4.15）

苫小牧市埋蔵文化財調査センター	高丘Ｅ遺跡、静川9遺跡、とまこまい埋文だより　№22
青森県埋蔵文化財調査センター	埋文あおもり　第10号
岩手県立埋蔵文化財センター	わらびて　№51
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団	㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第109・113・115集
㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団	設立10周年記念誌　「10年のあゆみ」
㈶千葉県文化財センター	房総考古学ライブラリー　5、千葉県文化財センター研究紀要12、研究連絡誌　第29・30号
㈶印旛郡市文化財センター	昭和63年度　㈶印旛郡市文化財センター年報　5、平成元年度　㈶印旛郡市文化財センター年報　6、㈶印旛郡市文化財センター発掘調査報告書　第18・30・31・34・37集
㈶香取郡市文化財センター	事業報告　Ｉ－昭和63年度・平成元年度－
神奈川県立埋蔵文化財センター	池子遺跡群調査だより　5～10
富山県埋蔵文化財センター	富山県埋蔵文化財センター年報　平成元年度、富山県総合運動公園内遺跡群発掘調査概要　Ｉ、北陸自動車道遺跡調査報告　朝日町　5、埋文とやま　第33号
山梨県埋蔵文化財センター	山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第53・55集
長野市埋蔵文化財センター	長野市の埋蔵文化財　第37集
㈶愛知県埋蔵文化財センター	埋蔵文化財愛知　№24
三重県埋蔵文化財センター	三重県埋文センター通信みえ　№3
㈶滋賀県文化財保護協会	文化財教室シリーズ　№116～120
滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース　第130～132号
㈶大阪市文化財協会	葦火　30号
㈶東大阪市文化財協会	東大阪市文化財協会ニュース　Vol.5　№2
㈶枚方市文化財研究調査会	枚方市の鋳物師　一、枚方市文化財調査報告書　第23集、ひらかた文化財だより　第６号
高槻市立埋蔵文化財調査センター	高槻市文化財調査概要　ＸＶ
奈良国立文化財研究所	平城京　長屋王邸宅と木簡
奈良県立橿原考古学研究所	宝院遺跡発掘調査報告書、奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第59冊
㈶元興寺文化財研究所	㈶元興寺文化財研究所通信　№37

㈶広島県埋蔵文化財調査センター	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書　第85～88集、賀茂学園都市開発整備事業地内(西高屋地区)遺跡群　V、年報　V
	昭和63年度、ひろしまの遺跡　第43号
㈶香川県埋蔵文化財調査センター	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告　第8・9冊、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査概報　平成元年度　瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告　Ⅶ、㈶香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成元年度
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財調査報告　第102集
群馬県教育委員会	下境Ⅰ・天神
坂戸市教育委員会	坂戸市史　近代史料編
勝山市教育委員会	勝山市埋蔵文化財調査報告　第7集
敷島町教育委員会	天狗沢瓦窯跡発掘調査報告書
境川村教育委員会	境川村埋蔵文化財発掘調査報告書　第6輯
多治見市教育委員会	多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書　第24・26・27号
名古屋市教育委員会	名古屋市文化財調査報告　23
豊橋市教育委員会	豊橋市埋蔵文化財調査報告書　第12集
五個荘町教育委員会	五個荘町文化財調査報告　17
野洲町教育委員会	野洲町文化財資料集　1990－2・3
泉佐野市教育委員会	俵屋遺跡発掘調査報告書、若宮遺跡発掘調査報告書、三軒屋遺跡89-4区調査報告書、三軒屋遺跡89-6区調査報告書、泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要　X
泉南市教育委員会	卑弥呼とその時代
大東市教育委員会	大東市埋蔵文化財調査報告　第7集
芦屋市教育委員会	芦屋市文化財報告　第20集
赤穂市教育委員会	赤穂市文化財調査報告書　26
榛原町教育委員会	榛原町文化財調査報告　第6集
広島市教育委員会	広島市の文化財　第46～48集
北九州市教育委員会	北九州市文化財調査報告　第48・49集
吉井町教育委員会	吉井町文化財調査報告書　第6集
千代田町教育委員会	千代田町文化財調査報告書　第11集
熊本市教育委員会	大江東原遺跡　Ⅱ
佐伯市教育委員会	佐伯地区遺跡群発掘調査概報　Ⅱ

竹田市教育委員会	平成元年度　竹田地区遺跡群発掘調査報告書、平成元年度　岡藩主おたやま公園整備事業報告書、平成元年度　史跡岡城保存修理事業報告書
東北歴史資料館	東北歴史資料館資料集　19・29
秋田県立博物館	博物館ニュース　No.83
土浦市立博物館	土浦市政施行50周年記念第６回特別展図録　古代の装身具・玉ー鳥山玉作り遺跡とその周辺ー
栃木県立博物館	第34回企画展図録　古墳出現のなぞ-激動の世紀に迫る-、日本のロビンフッド　那須与一は生きている、那須与一の歴史・民俗的調査研究
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館データベース利用申請の手引き、国立歴史民俗博物館データベース検索の手引き
成田山霊光館	なりた　No.49・50
君津市立久留里城址資料館	君津市立久留里城址資料館年報　平成元年度
小田原市郷土文化館	小田原市郷土文化館研究報告　No.27
茅ヶ崎市文化資料館	資料館だより　No.73
小松市立博物館	小松市立博物館だより　第48号
山梨県立考古博物館	山梨県立考古博物館だより　No.23
茅野市八ヶ岳総合博物館・茅野市尖石考古館・茅野市美術館	茅野市の博物館だより　八ヶ岳通信　No.４
浜松市博物館	浜松市博物館館報　Ⅲ、浜松市博物館だより　No.33号
名古屋市博物館	特別展　陶器の流れー須恵器から渥美・常滑・瀬戸へー、名古屋市博物館年報　No.13（平成元年度）
斎宮歴史博物館	平成元年度　斎宮歴史博物館年報
大阪府立弥生文化博物館	弥生文化博物館叢書　１、弥生文化博物館資料集　１、弥生文化博物館図録　１
神戸市立博物館	博物館だより　No.34
㈶辰馬考古資料館	考古学研究紀要　２
和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所	紀伊風土記の丘年報　第17号
島根県立八雲立つ風土記の丘	八雲立つ風土記の丘　No.105
出雲玉作資料館	玉作資料館ニュース　第16号
広島県立歴史博物館	広島県立歴史博物館ニュース　第５・６号
広島県立歴史民俗資料館	年報　平成元(1989)年度
㈶日本はきもの博物館	日本はきもの博物館だより　41
佐賀県立九州陶磁文化館	セラミック九州　No.22

長崎県立美術博物館	長崎県立美術博物館だより　No.111
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース　No.25
宮崎県総合博物館	平成２年度特別展－学園都市調査10年のあゆみ－日向の遺跡展
山形大学山形史学会	山形大学史学論集　第11号
東北学院大学東北文化研究所	東北学院大学論集－歴史学・地理学－第23号
東京大学総合研究資料館	東京大学総合研究資料館ニュース　21号
早稲田大学校地埋蔵文化財調査室	早大校地埋蔵文化財調査室月報　No.70
法政大学多摩校地遺跡調査団	法政大学多摩校地遺跡群　Ⅳ－Ｅ・Ｄ・Ｂ地区－
名古屋大学文学部考古学研究室	名古屋大学考古学陳列室だより　第２号
愛知学院大学文学会	愛知学院大学文学部紀要　第20号
大阪大学文学部	待兼山論叢　第24号
大谷女子大学資料館	大谷女子大学資料館報告書　第24・25冊、収蔵品図録Ⅲ-中米土器-、大谷女子大学資料館だより　No.46～49
大手前女子大学	大手前女子大学論集　第24号
愛媛大学法文学部考古学研究室	愛媛大学法文学部考古学研究報告　第１冊
愛媛大学埋蔵文化財調査室	愛媛大学埋蔵文化財調査報告　Ⅲ
九州大学九州文化史研究施設	九州文化史研究所紀要　第36号
鹿児島大学埋蔵文化財調査室	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報　Ⅵ
東邦大学附属東邦高等学校東邦考古学研究会	東邦考古学研究会創部30周年記念論集　東邦考古　15号
宮城県多賀城跡調査研究所	宮城県多賀城跡調査研究所年報　1989、多賀城関連遺跡発掘調査報告書　第15冊
石畑狭山嶺遺跡調査会	石畑狭山嶺遺跡調査報告書
日野市遺跡調査会	日野市栄町発掘調査終了略報
玉川文化財研究所	横浜市港北区師岡打越遺跡発掘調査報告書、川崎市高石五丁目遺跡発掘調査報告書
雄山閣出版株式会社	古墳時代の研究　第３巻～生活と祭祀～
㈱名著出版	歴史手帖　第208～210号
㈶古代學協會	古代文化　第383～387号、古代学研究所研究紀要　第1輯
牧野古窯跡群埋蔵文化財調査会	社・牧野-古窯跡群等の発掘調査報告書-
淡神文化財協会	松原千畳敷遺跡試掘調査報告書、淡神文化財協会ニュース　創刊号～第９号
朝鮮学会	朝鮮学報　第137・138輯

博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード　Museum　Kyushu　第34号
國立中央博物館	國立博物館古蹟調査報告　第22冊
釜山大學校博物館	釜山大學校博物館遺跡調査報告　第14輯
京都府教育委員会	京都府指定・登録文化財等目録、重要文化財　同志社礼拝堂修理工事報告書
丹後町教育委員会	京都府丹後町文化財調査報告　第７集
弥栄町教育委員会	歴史シンポジウム　丹後と古代製鉄
大宮町教育委員会	大宮町文化財調査報告　第５・７集
野田川町	町報「のだがわ」　No.270
京都府農林水産部耕地課	土地分類基本調査　四ッ谷・小浜・北小松・熊川
京都府立丹後郷土資料館	丹後郷土資料館友の会ニュース　No.35
京都府立総合資料館	総合資料館だより　No.87
(財)京都府文化財保護基金	文化財報　No.72
(財)京都古文化保存協会	会報　第70号
京都市文化観光局文化部文化財保護課	京都市の文化財　第８集
京都府京都文化博物館	古代豪族と朝鮮
立命館大学文学部	学芸員ＮＥＷＳ　ＬＥＴＴＥＲ　第３号
佛教大学図書館	鷹陵史学　第16・17号
口丹波史談会	丹波史談　133号
京都考古刊行会	京都考古　第58号
大本山　東福寺	東福寺防災施設工事発掘調査報告書
伊野近富	日本歴史探検　１～４、陶磁の東西交流
小泉信吾	遊戯史研究　第２号
小山雅人	季刊考古学　第30号
水野正好	淀江町合併35周年記念事業淀江石馬国際シンポジウム古代石馬と大陸文化を考える
遊佐和敏	東邦考古学研究会創部30周年記念論集　東邦考古　15号

ー編集後記ー

六月になり、むし暑い日々が続きますが、情報40号が完成しましたのでお届けします。

本号は、年度当初の情報ですので、平成２年度の調査のまとめと平成３年度の調査予定を掲載いたしました。それ以外に、特に成果のありました宮津城跡・桑飼上遺跡・雲宮遺跡について、抄報を載せました。

また、職員の日頃の研究成果も載せることができ、充実した号になりました。よろしく御味読下さい。

（編集担当＝土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報　第40号

平成３年６月25日

発　行　　㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の３
TEL (0775) 933－3877 (代)

印　刷　　㈱　中　村　太　古　舎

TEL (0775) 24－4370